



利根川圖志

二

ル 4
6317
2





利根川圖志卷二

下總 布川 赤松宗旦 義知 著



利根川上中連合

利根川の全流凡七十餘里その大小不因てこれを上中下の三に分つ即本源上野國利根郡藤原の奥より二十八里餘を經て渡良瀬川落合の處不至るこれまでを上利根川といふかくて武藏國葛飾郡栗橋御關所の前不至て官渡あり房川渡といふ川幅凡三里不以下分れて二支と爲る南を權現堂川といふ島川の東不權准ず此の川長二里許關宿不至り赤堀川の分支ある逆川を并名起る此の川長二里許關宿不至り赤堀川の分支ある逆川を并

世江戸川とあり下總國葛飾郡堀江新田不至て海不入る北を赤堀川といふ長一里半許廣六十間より二百三十間不至る再分れて逆川と爲り平時ハ南一て江戸川不落洪水の時ハ關宿の杭行して中利根川不落この三川の間二島を爲す合せて五村島と

利根川上中連合

いふ佐伯川これを分つこの島始ハ五村あり一赤堀川の下即中
利根川凡十六里餘を經蠶養川落合の下不至て下利根川と爲る
古昔利根川の流ハ今の處ありて尚南方に在りき今これを古利
根川といふ今の利根川上中連合の邊ハ古の下河邊庄櫻井郷か
り古河より關宿邊までをいふ五ヶ村島の内江川中古鎌倉より奥
新田古名櫻井新田といへるもこの故あり
州不行くむとてこの邊を過ぎ一事疑か
か、り花輪澤入古峯原峠を越え終高高原峠を經て奥州會津不
入りハさる事にてこの野鹿沼ある山口安良が押原推移録中卷ハ
道とハ固より異あり許多の人の經過せ一中不遺物の有るハ
中田光了寺不藏せる静女舞衣あり前林を經て伊坂不率せ
る由静女舞衣縁成氏朝臣の古河城不住一藤田氏の關宿不在り
起不見えとあり頃ハ士民羣集の街あるべ一道興准后の村君武州埼玉郡に上
村有阿佐間の同郡を經て古川中田郡山不來り多ひ更に鎌倉より
鳥喰を過ぎて佐野舟橋の方に行き多へるハ文明十八年の秋

りこの地後ハ北條家不屬せ一が天正十八年小田原落城の後
東照神君不歸一元和止戈の後この處官渡と爲れり當時下野以
北不行くに必由の要路あり

利根川在下總國俗說飲此水者令人

羅山先生

夷齊設使飲貪泉 義氣清風不可遷

唯有古今天性在 癡人猶守利根川

總說こ、不盡く以下各地を記す

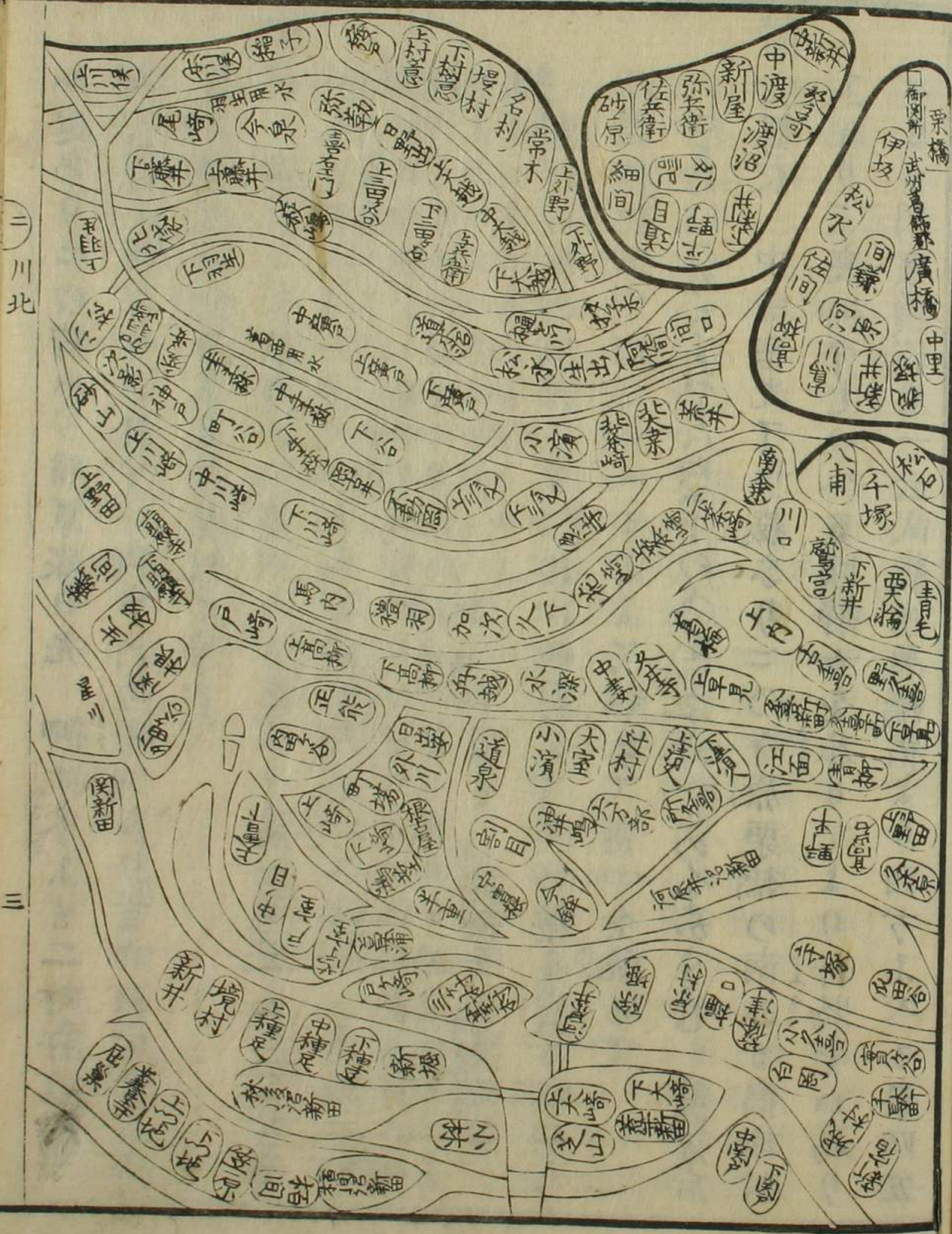
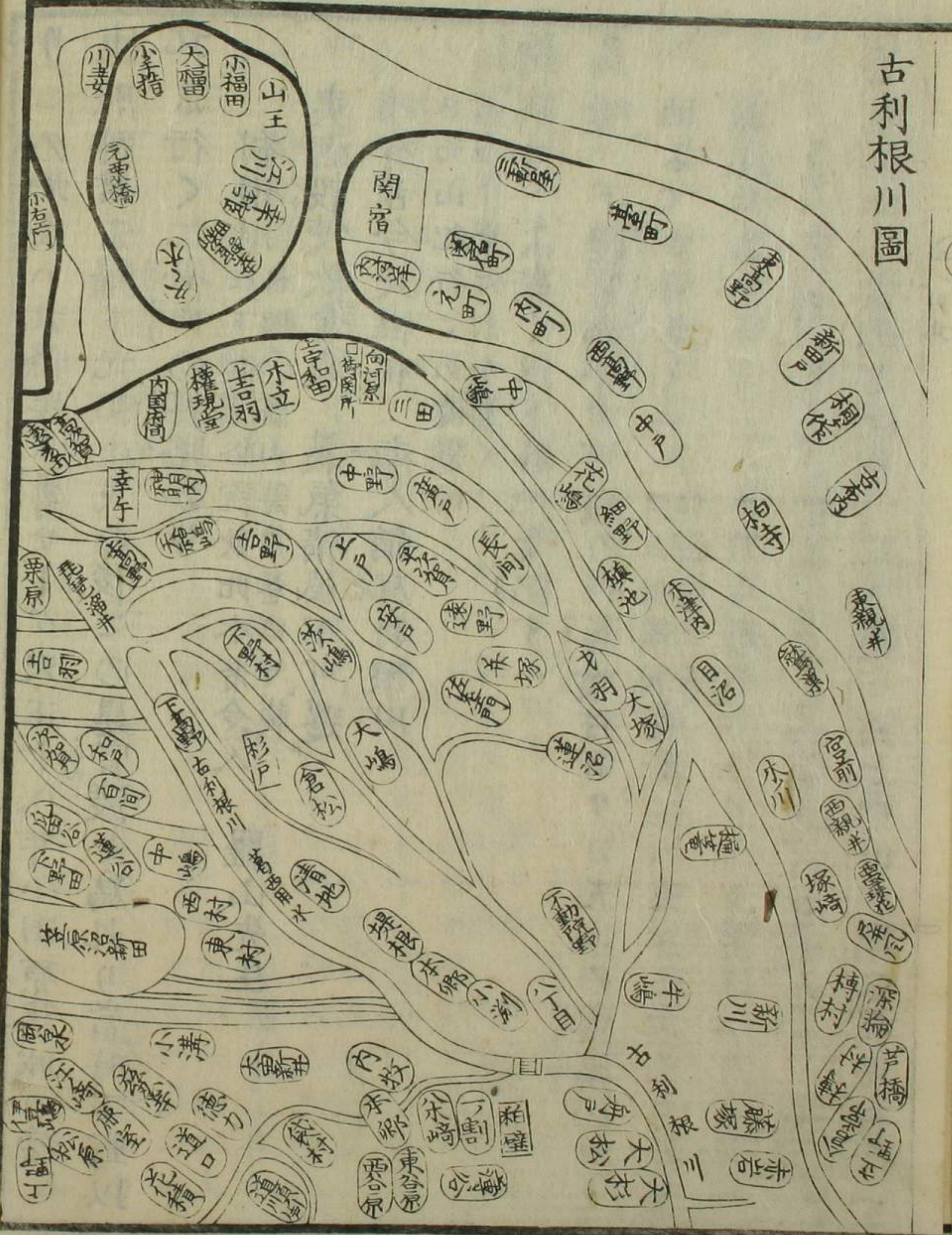
鳥喰 下總葛飾郡古河領の内鳥喰村あり日光山の道筋の少一

西不て古海道といふ以上廻國雜 渡良瀬川東岸の地あり廻國
雜記云鳥バミといへる所を過行きたる不日暮れたりこれハ

さそはれて我もやどり不いそぐありうへるゆふの鳥喰の里 道興准后

茶屋新田 常總軍記卷一云下總古河と中田の間不茶屋村とい

古利根川圖



二 三 北

三

ふ處ありこの所ハ 將軍家日光 御社參ふも二町許の内
御駕籠召させられず 御歩の恒例あり昔古河公方の時
ふ御茶屋の跡ゆる茶屋村と号す

中田 江戸より日光山 并奥羽の官道あり藤知文東山志上巻云

中田 古河まで一里十八町 土井彦封内寺社八幡社 香取社
驛程見聞雜記と卷云中田宿の入口東の方に八幡香取兩社合
殿あり往來の鳥居より一町餘も入れ本社あり神さびていと
尊一昔ハ川の北不在り一町餘も入れ本社あり神さびていと
替りて今ハ爰ふ移すとあり 瀨 時宗 本願寺 眞言宗 淨土宗
淨土宗 岩松山聖徳院光了寺 畧 按に此處ふてまめ藥を賣る効あり
廻國雜記云中田といへる所ふて始めて富士を眺めて

このはのみちもおふぬドのをいうてみやこの人よかむ 道頓准后

静女舞衣 中田宿光了寺藏ありこの寺原栗橋の南なる高柳村

不在りて高柳寺といへる頃静女を葬りてより什物とい爲り
ゆる閑窓瑣談卷一云武藏國栗橋宿より西方ふ入る事四五

町高柳村の内松永といふ處ふ杉あり昔よりしてこの杉を静

の塚と言傳ふ近頃中川君の立てさせ多ひ一碑あり静女塚と

記す云この説由ありてきこゆ 日光驛程見聞雜記上巻栗橋條
内宝治戸といふ所ふ静の墓印の杉の大木あり静御前義經の
迹を逐ひ此所ふ來り奥の高館ふて戦死すと聞て俄ふ病で死
六丈七尺張り十五間圍二丈三尺今年五月關東の郡代中川飛騨
守賢を捐てその事を石に勒して樹下ふ立つとあり以上こ
琴柱の墓あるこの寺古ハ天台宗あり一が今ハ淨土眞宗ふて
報恩寺末あり改宗の事静女舞衣縁起ふ建保年中宗祖親鸞上
淨土眞宗光了寺と改号せり西願ハ後鳥羽院の北面土岐又太
郎國村の次男出家して權大僧都法印圓崇といふと
この舞衣の事縁起云後鳥羽院の御宇一歳大早魃して耕草連
枝も枯果國民の愁安かりず貴僧を請ど兩乞執行まませと
も一滴の潤を公卿詮義の上一百人の舞姬を集め神泉苑の
池ふて法樂の舞を舞ハせむふ九十九人まで舞ハれとれと

その驗あやまち一百人目めふ静しず既す不な舞まハむとせし時御棧鋪御簾の内より御衣を下さる乃静頂戴ちやうたいしてこれを著あきし舞まひとれバ車軸しゃちやくの如く雨降りたり即この舞衣あり蛙あま蟻りやう龍りゆうの舞衣といふ静しずの事義經記卷五静吉野山しずきちのやまに捨すてりる、事條云一歳都みやこふ百日の早はやの有りこそ三院さんいんの御幸ありて百人ひゃくにんの白拍子はくぱしの中なかふと静しずが舞まひを下さる見みえり三日さんじつの洪水こうすい流ながれ、若わ宮みや八幡宮はつたぬみやへ参詣さんぎの事條等及および諸書しよしょ不見なえり此こゝに猶なほ卷六まゝ静しず若わ宮みや八幡宮はつたぬみやへ参詣さんぎの事條等及およびその時の祿ろくはて文ぶんは螭し龍りゆうかどつきつきふるべし然しかれバ義經公頼朝公の御勅氣おつしきを蒙あまり落人おちひととちり多おほふ静しずハ義經公のおとひ人ひとかれバ鎌倉へ召よされ義經の御行方問みゆきかたハせまませども知りざる故御暇ごいさま下くださる静しず思おもふ様義經公吾妻ごさいふ忍しのび居ゐるハむ幸さいに是こゝまで下くだり空くく都みやこ歸かへらむ事無念むねんあり御行方尋みゆきかたぬむと按あに静しずが鎌倉かまくら下くだりハ文治二年三月一日ぶんぢにねんさんげついちにちして義經朝臣ぎけいしやくしん高たか館たか自みづか盡じんハ同五年閏四月廿日どうごねんうんしがつにじふにちありされバ静しずの奥州下おくしゆくだりこの時ときの事ことハ非ひず義經記本文ぎけいきほんぶんハてんりうの麓ふもとと爲なり義經奥州ぎけいおくしゆはて甘あま歳さいはてうせたる由よしハへど松風庵しょうふうあんの評判ひやうはんハハリとつきて暫しばらく嗟あはれれの邊へらふ在ありしが後南都ごなんと不な住ぢゆうミミととかり又奥

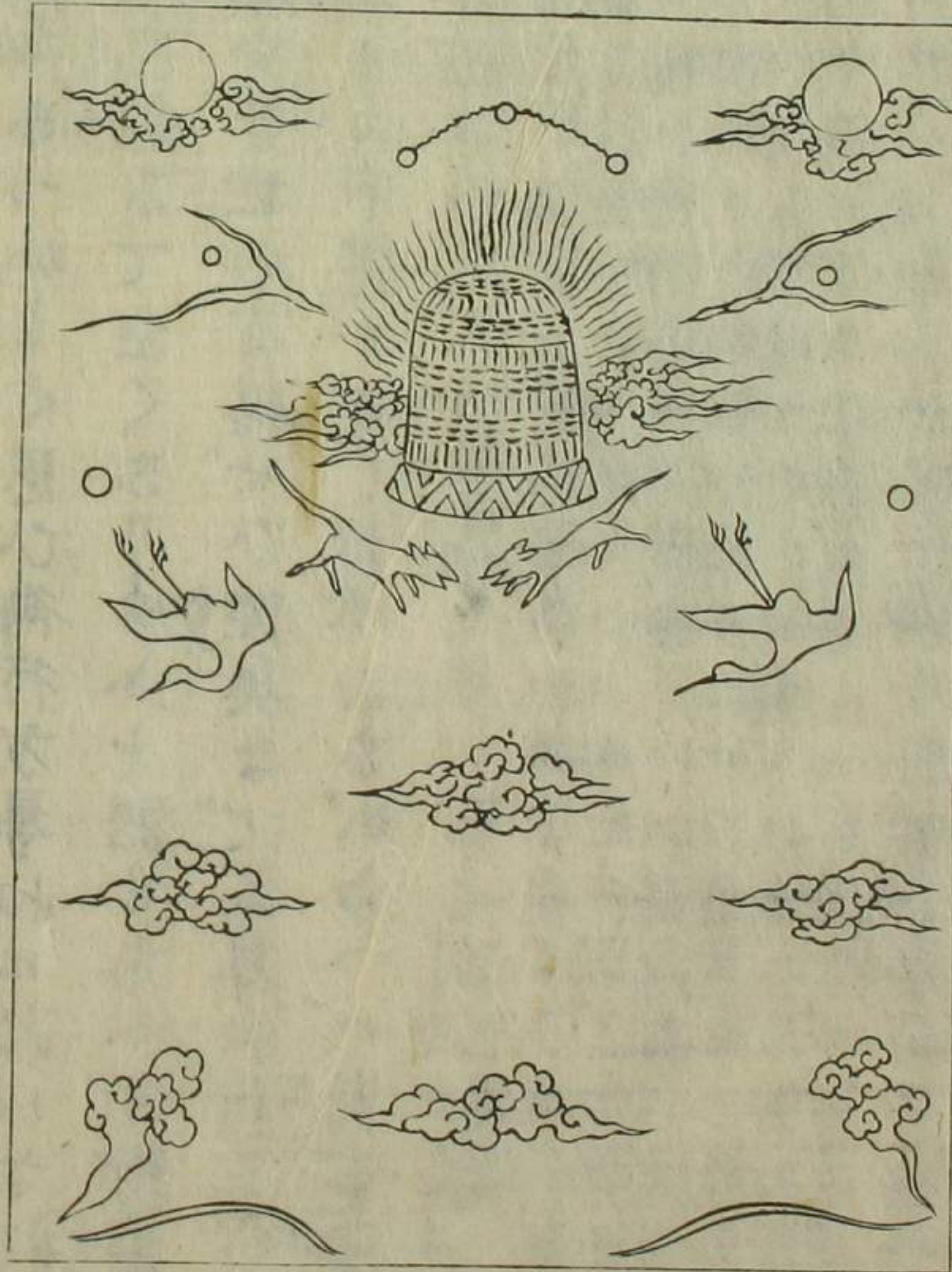
州しゆの方かたへ下くだりしももいいへりと侍女琴柱じにやうきんぢゆうを召連當國下邊見よびつらたうこくくだへらみとあれバさる説せつも有ありしかりと侍女琴柱じにやうきんぢゆうを召連當國下邊見よびつらたうこくくだへらみといふ里さとまで下くだり多おほふ然しかるふ往來やうらいの人々ひとびとロ々ろろふ義經公の御尊みづかみ申まをししたり静御しずみあつかいく思おもひ御行方尋みゆきかたぬはれバ義經公ハさる頃高館たかたかふて空くかり多おほふと語かたとあへず静泪しずなみふ袖そでを沾うるし實じつふ頼少たのしみき世よの有様ようさませひ陸奥むつまでも尋たづぬ行ゆむと思おもひし心こゝろを盡つくし、甲斐かうはいと無なく浮世うきよふかかりへハ剃髮ていさつ深衣しんいの身みとかりて義經公の未來御菩提みらいごぼだいを弔なぐさむと橋はし即下邊見すなはちくだへらみを踰こえて日光驛にっこうえき程見聞雜記上卷茶屋新田條じやうけんじやうしやうじんぢゆうふ是こゝより東あづまの方かた十町餘じゆぢゆう行ゆけば南みなみふ逸見いけん村むらと大堤おほつゑといふ兩村りうむらの間まふ上うへ水みづありその所ところ不な在あり土橋つちはしを静御前しずみづまへの思案しあん橋はしといふ静義經しずぎけいの跡あとを慕たづひこの所ところ不な在あり奥州おくしゆへ行ゆかむや止とどめむやと思案しあんせし所ところありといひ傳つたふと持もつし木きありとて参詣さんぎ羣集ぐんしゆししる事ことをいへり前林ぜんりんといふ里さとふか、り中畧ちゆうりやく自分手元の柳しやうを引結び迷まよひし道みちの印しるしと爲なり都みやこの方かたへ向むかひしるふこの所ところを静返しずかへといふ當寺たうじ三十町東前林さんじゆぢゆうあづまぜんりんといふ所ところ不な在あり結柳むすぶしやうそれより西にしふ當たうり伊坂いさかといふ里さとふか、

静女舞衣圖

長三尺五寸

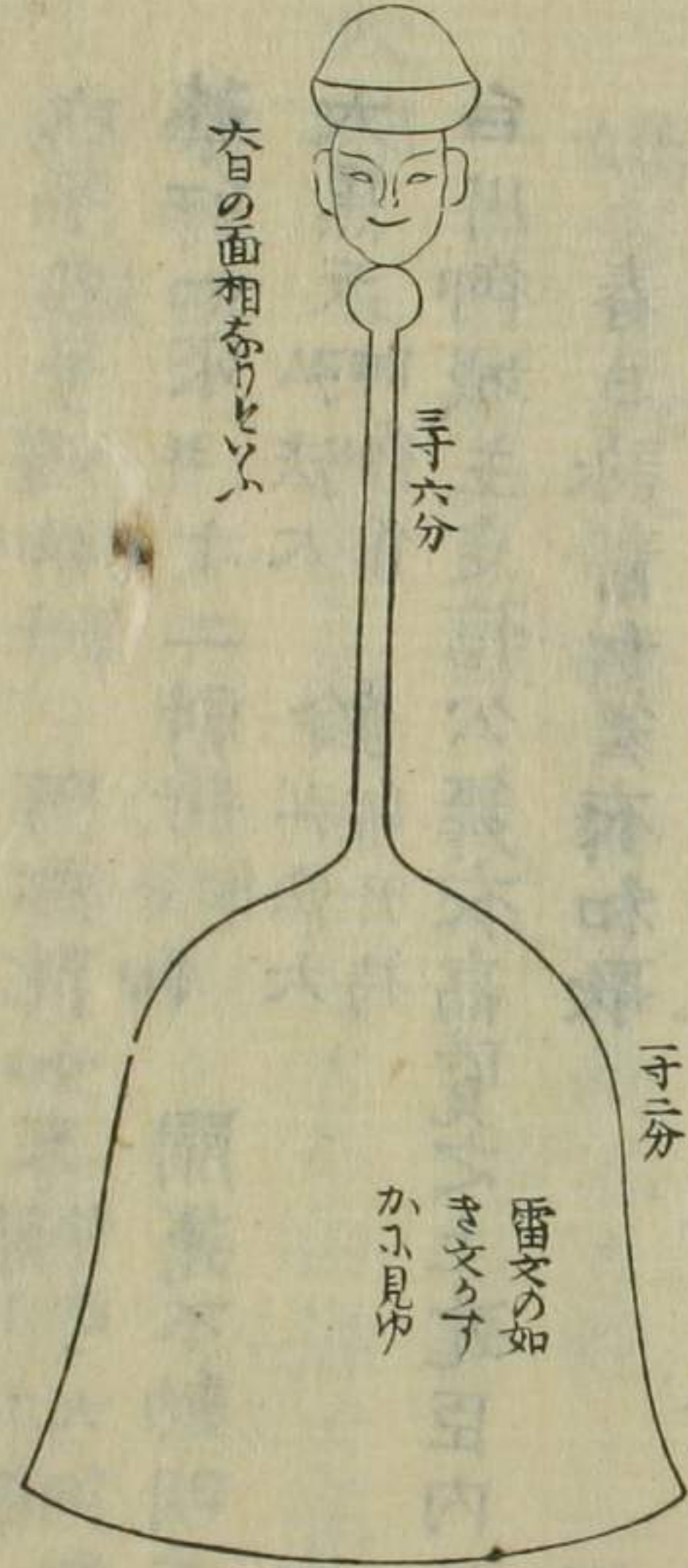
地黒く種々の絲にて文を繡せり

幅一尺五寸五分



弘法大師鈴圖

銅色甚古



六百の面相ありといふ

手六分

寸二分

雷文の如
き文うす
かゝ見ゆ

底徑 一寸七分五厘

義經朝臣燈



二尺六寸五分の鐵
にてその餘ハ木
り木地のまゝあり

静女懐劍

義經朝臣所賜



鐵

長九尺八分程

川北

六

無銘

り多ひいふいと、さえ秋ハ物うき習ちりたる旅の疲と均
 く思はずも定ふき世と諸共小野邊の露と消えたる琴柱泪と
 諸共小當寺小葬り一墓の印一本の杉を植ゑおく今ふこれ
 を一本杉といふこの時守本尊并頂戴の舞衣義經公形見の懷
 劍當寺小納り常什物と爲り畢ぬ
義經公奥州御下向の時預けり
即永錢一貫文御用立也傳
十字名号全 蓮坐御影繪御銘御贊 覺如上人御作
六字名号 蓮如上 阿弥陀如來 靜守本尊 慈覺大師御作
藥師如來并十二神將全御 開運不動明王 智證大
大黒天 師弘法大 鈴 師弘法大
白川御城主定信公舞衣高覽之上近臣内外函被爲奉納者也
春日詠靜女舞衣和歌
源德純 新田氏
やまのはふちまふ袖のまつるふぞたふびく雲も雨とやある

題妓靜舞圖

大窪行

嬌容 袅娜太多情 柳弄 罽肢 風力輕
 一曲霓裳羽衣舞 誰知 中有鬪牆聲

大櫻 日光驛程見聞雜記上卷中田條云宿より東の方一里足り
 ず大山といふ所小大光院といふ修験の寺あり寺内小園三丈
 程の櫻の大木あり單辨ふて香ありといふ
 熊澤蕃山墓 大堤鮭延寺小在り先生名ハ伯繼字ハ了介又了號
 ハ蕃山又息遊軒といふ備前小事へて功績あり文學ハ人の知
 る所ありその行狀ハ門人巨勢直幹の實記草加定環の行狀菱
 川大觀の傳記ありといひて先哲像傳卷二小定環の行狀をあ
 げり文中先生の功績をあげたるハ正保乙酉備前侯依京極
 主膳再求以祿之于時先生歳二十七備前國政大革承應甲午備
 之前中二州大飢窘迫及九萬人國者不知計爲乃委事於先生先

生出命施政。民大賑。尋修隄池。蓄瘠磽。上下得所。安遂設庠序之教。其舉皆出先生。及其家弟與焉。制減佛寺。壞淫祠。といへる。よて知るべし。後故ありて。備前を辭し。明石に在て。松平日州侯不事へ。侯の移封。不古河。不從。ひ上表。不因て罪を。幕府。不獲。頼政。郭。不禁錮。して終る。元禄四年辛未八月十七日。壽七十三。鮭延寺。不葬。り。儒禮を用てす。この寺。ハ鮭延。越前の舊。臣主の爲。不建つる所あり。鮭延。ハ出羽の地名。越前。ハ最上。義光の舊。臣事。ハ常山記。談明。良洪。範等。不見え。たり。

三島大明神社 水海村。不在り。廻國雜記云。下總國。こ不りの山といへる。所。不伊豆の三島を勸請し。奉りて。大社。ましく。なり。かの別當の坊。不暫逗留し。侍りたる内。不哥。ふと。度々。いひす。て。とも少々書し。おき侍る。

たづね來て。と。ふ。と。一。まの。わ。か。る。名。を。お。も。ひ。ぞ。づ。の。ま。ほ。神。風。道。興。准。后。標。注。云。下。總。葛。飾。郡。山。郷。水。海。村。不。在。り。三。島。大。明。神。社。領。五。石。

別當滿藏院古河よりハ東の方栗橋の北東に在る村あり。云々按

后同時富士蟲初雁葛菽の吟諸國圭齊録下總國部新義眞言のあり。この處の歌枕とすべし。諸國圭齊録下總國部新義眞言の

中五石葛飾郡山郷水海村滿藏院と見え。り。この餘曹洞宗。不十

法華宗。不五石。葛飾郡水海村。吉祥寺。二

日光驛程見聞雜記上卷中田條云。又一里東。不水海村。あり。昔。梁

田家の領せし。所あり。その村の名主。鰐口を。所持。す。是ハ三島。明

神へ寄進せし。物あり。文龜三年八月日。梁田右京亮平宗助と鑄

付。にて。有り。同村。不北條氏直。が。虎の印。を。居。ゑ。る。旋書。を。所持

し。る。百姓。あり。惣。て。この邊。不梁田家。臣下の子孫。多し。この

所。中田を。の名。高き。繭の。藥。を。賣。る。齋藤源太左衛門。と。先祖。ハ。彼

の家の老あり。梁田ハ五十万石程領せし。大名。不て。有り。たる。と

そ。本注。按。不右京亮宗助。ハ。康正の頃。古河の成氏。不屬。し。上杉。と

戦。ひ。し。出羽守。が。子孫。ある。べし。梁田。ハ。關宿の城主。あり。云々

五村島 下總國葛飾郡。不屬。す。南。ハ。權現堂。川。北。ハ。赤堀。川。東。ハ。逆

島

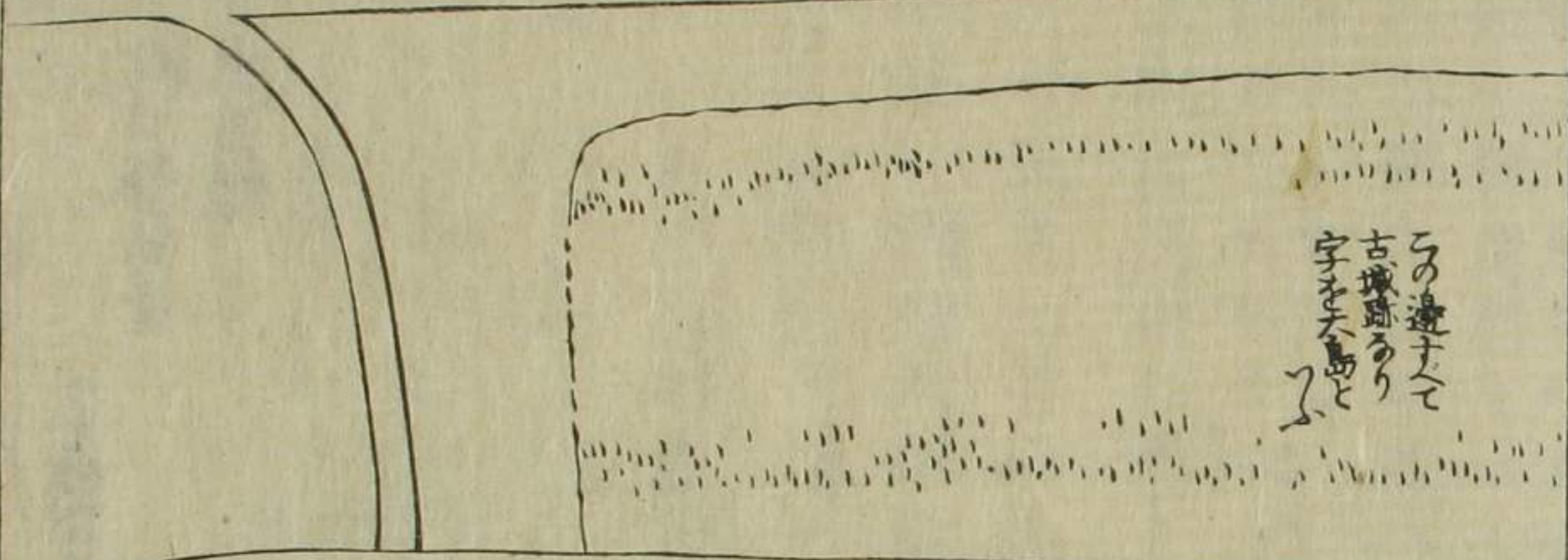
川の間ふ在り又佐伯川を以て川妻と其の餘の十一村を分つ
これと古五村ありしが今かく分れしかり古ハこの地下河邊
庄櫻井郷不屬す櫻井郷ハこの邊及び關宿より古河邊をいふ
いふこの島この島ふ小手指村あるを以て小手指差原の地とす
の内あり
る者ハ誤り見小手指差原の名ハ新葉集宗良親王歌の詞書ふも
義興義治の三將足利尊氏と戦ひし方六七里四方の地をいふ
差原ハ北野物部天神社より西北の方六七里四方の地をいふ
と見え武藏野地名考入間川條ふ小手指差原もこの邊ありとい
へり然るふ江戸地名所圖會卷十三の土人の説と書言字考卷
下練馬村小手指差原下總葛飾郡といへるハ同ト状の誤りこの島
一ふ小手指差原下總葛飾郡といへるハ同ト状の誤りこの島
小ありと雖古河城の舊址トヨブノ砂山富士見渡等の勝景あ
り又有土の寺多し

諸國圭齊録下總國部曹洞宗ふ二十石 山王山村 東昌寺十五石 東栗橋
院五石 同村 寶泉院まゝ五石新義真言 本栗橋村 寶藏院五石 同村 千手院五
石 小手指村 勝光院まゝ法華宗ふ十石 葛飾郡本栗橋 法定寺浄土宗ふ十石 本栗橋 隆岩

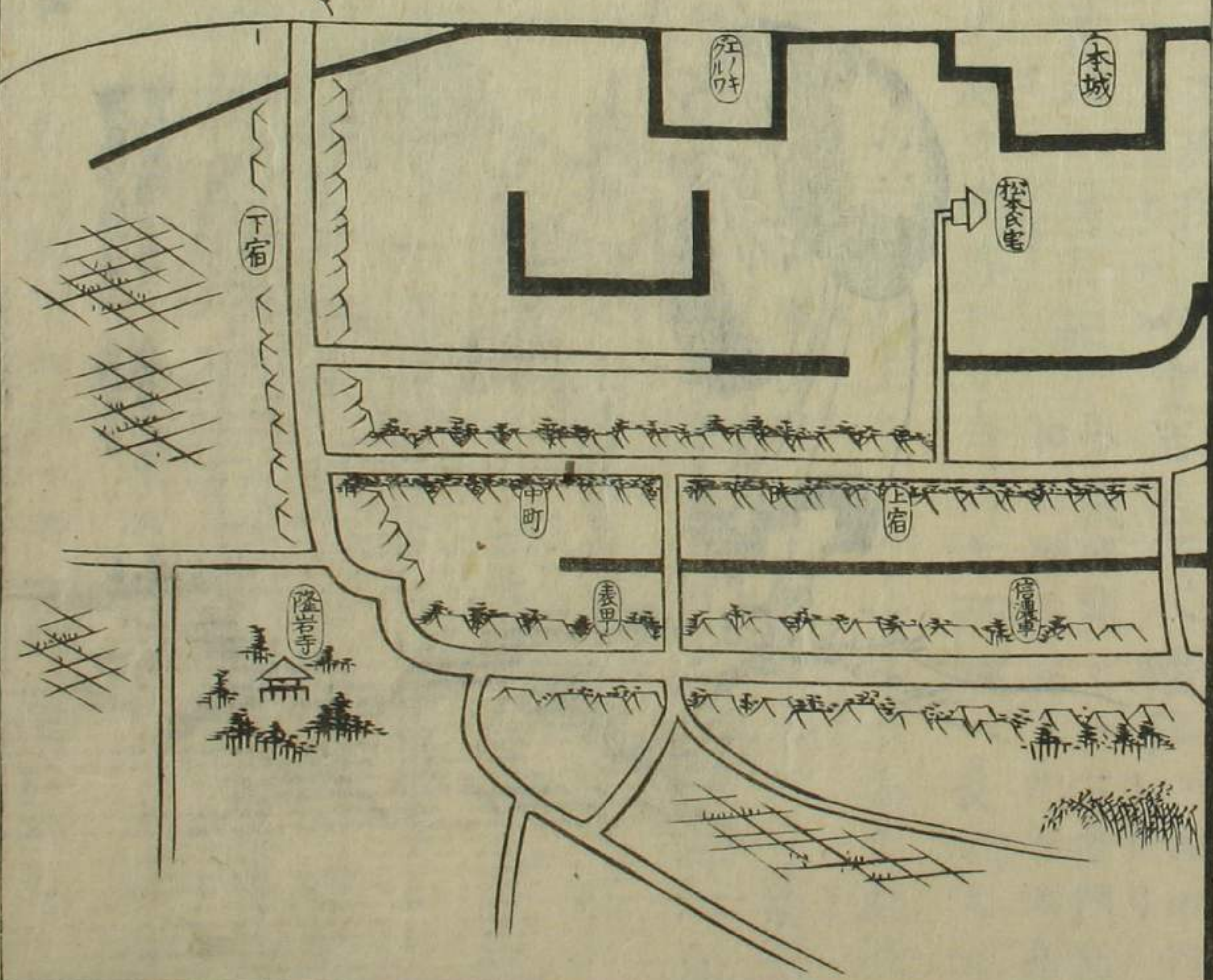
寺五石 本村 大泉寺この寺の檀那ある冬木某ハ古河公方の臣ふ
し今猶古河公方の文書を藏すといふ又關東古戦録ふ載ま
せらる里見の臣冬木丹波守ハこの同族ある尋ねべし
五石本山修験橋西光院と識せりこの處かく由緒ある寺院の
多し おん 八古河公方の座せし因りてあり

幸館村ふ生月の塚あり下ふ載す生月といふハ信けがさ
川妻 五村島の西隅あり佐伯川を以て東部と分つこの村の舊
家不築田河内守持助の感狀上杉輝虎及び直江兼續の書を藏
する者あり傳來未詳からず又古き膳枕十具あり傳説最奇か
り共ふ下ふ載す

古河城舊址 五村島元栗橋不屬すこの地權現堂川を掘りし
り城址も栗橋と二ふかれり今御關所ある栗橋不對へて此處
を元栗橋といひ川を夾て共ふ城山といふ本城榎曲輪七曲上
宿中町下宿古河町信濃町表町隆岩寺 嘯雲山といふ浄土宗あり
御朱印高十石寺號ハ

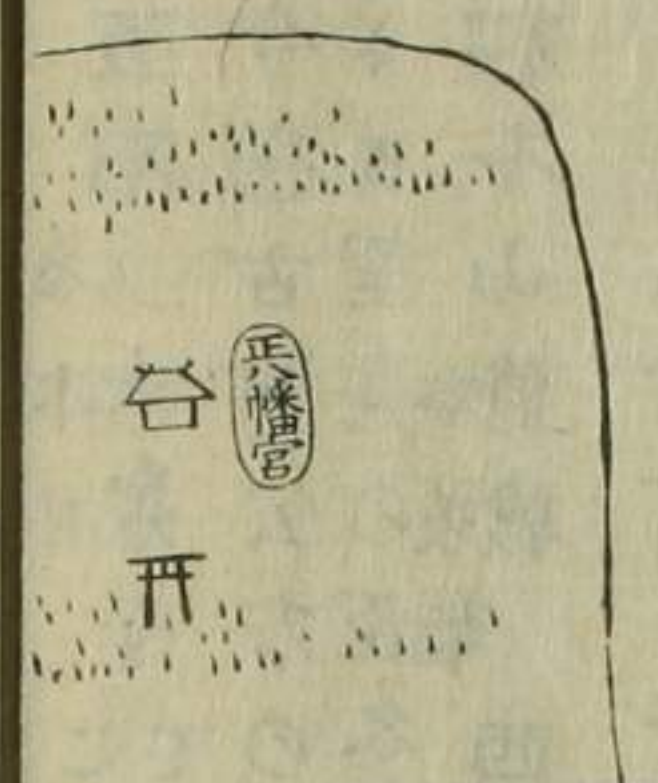


この邊に古河城あり字を大島とす

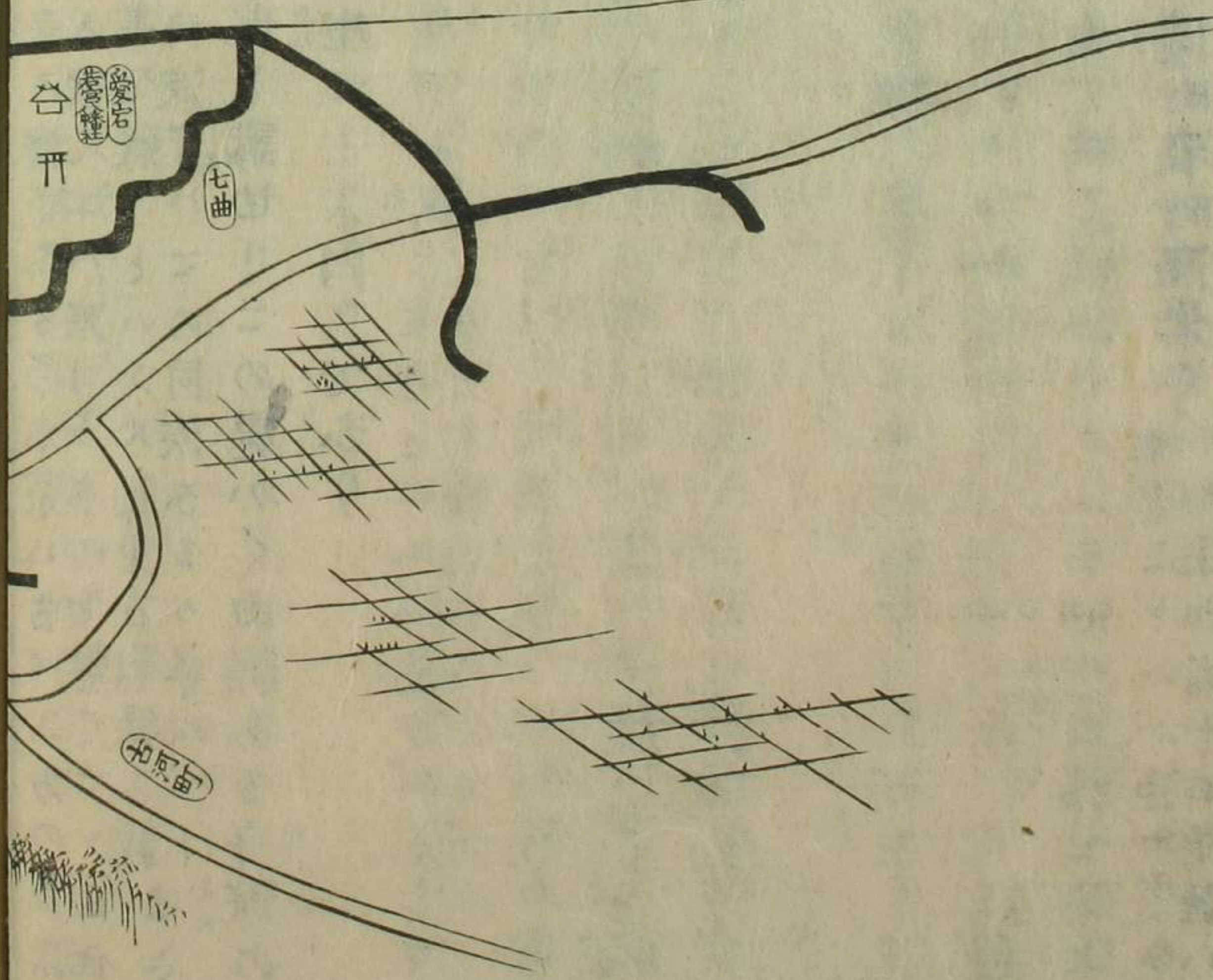


+

古河城舊址圖
惣名城山



正徳
谷
開



幸館村藝師堂
生月塚

元栗橋隆岩寺領

惣高三尺四寸五分 高一尺寸
笠石前幅一尺九寸 奥行一尺六寸



岡崎信康君の法號喚雲院殿隆岩超あま愛宕若宮八幡社七曲の内
 越大禪定門といへるふとるといふ
 八川北ふ在り正八幡宮八川南ふ在り外國府間と小右衛門新
 といふ古河ふこの城の起立詳さしあらず今の古河城ハ長祿元年
 由ある名ありこの城の起立詳さしあらず今の古河城ハ長祿元年
 不成氏朝臣の築きく所ありさてそれより七十一年前ある至徳
 三年五月七日小山若丸宮方と爲りて小山庄祇園城ふ籠れ
 る事を鎌倉大双紙上巻あろ記して鎌倉殿ハ七月二日御發向古
 河城ふ御座中畧十一月ふ鎌倉へ御歸陣ありといへりされバ
 今いふ御番城の類さひあるうさる因ちかふ由りて成氏朝臣とこの邊
 不止とまれるあるべしさて永享十二年結城合戦の時結城方より
 野田右馬助を大將として矢部大炊助以下古河城を繕つくて楯籠
 ると同書ふ見ゆ按野田ハ下野國築田郡の地名あり嘉慶元
 年丁卯五月十三日古河住人野田右馬助と同
 書ふ記せるハそこよその明年ある嘉吉元年四月十六日結城
 落城の下の文ふ同十七日古川城を北攻へき由相觸ふれりる、

之 廿 蓮尾集

槐系傳左後

乃所善法在子恒所勤修
以是教露之文之教修之
多之教 圓音中の之修之
法念可之仁 善之 善之
了心希之修之義重之修之

培自 仰 初 張 之 也 以 其 在
乃 世 心 心 名 在 之 矣 勿 忘 之
海 國 之 一 二 戶 動 之 矣 勿 忘 之
法 師 之 思 之 矣 勿 忘 之
此 之 抄 刊 本 法 師 之 思 之
之 矣 勿 忘 之 矣 勿 忘 之

志 願 之 書

七月廿六日

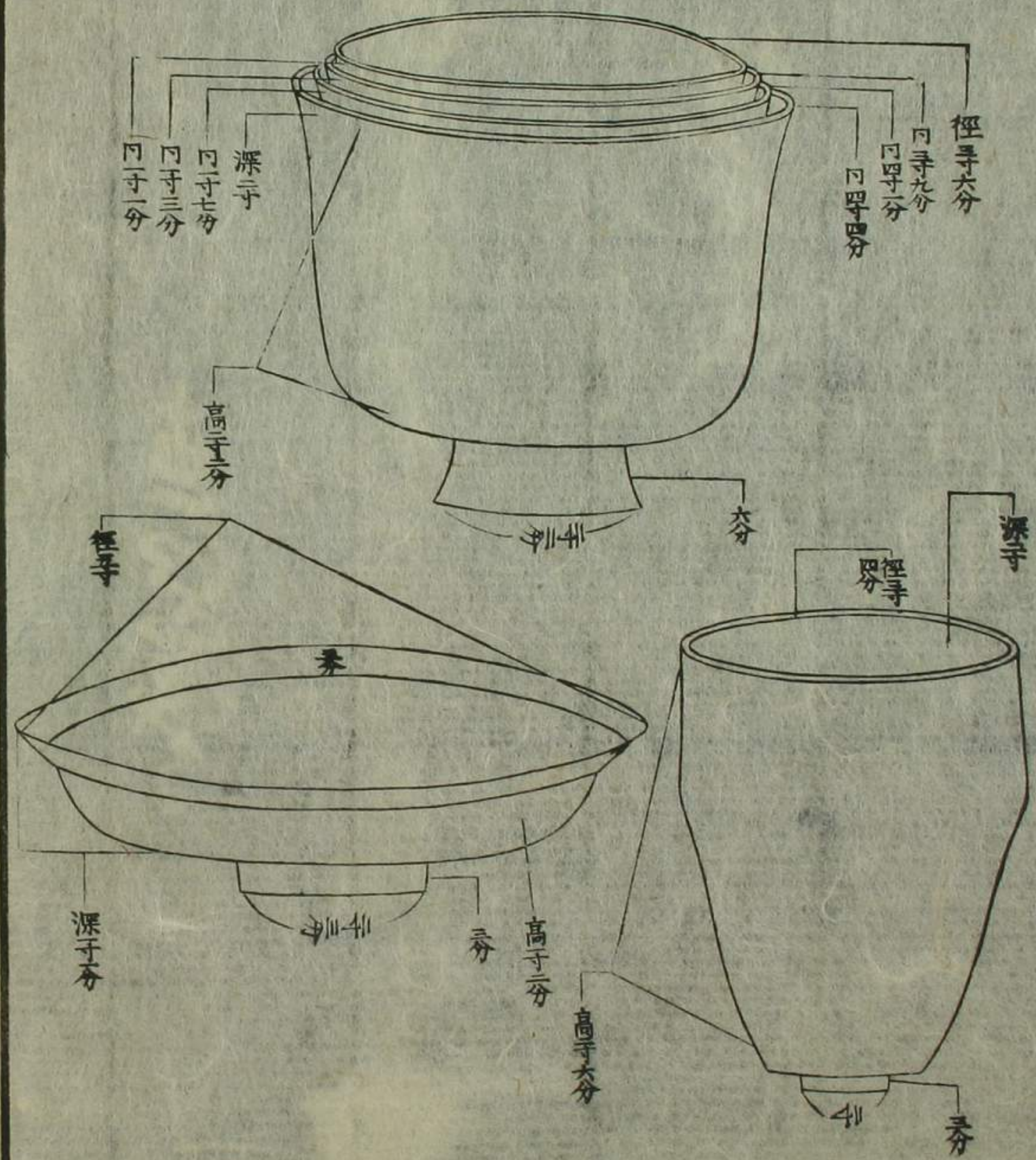
菊 齋

梶 原 慶

美 沙 紙

川妻隱里膳枕圖説

圖する所ハ下總國葛飾郡川妻村名主藤沼太郎兵衛家藏あり昔藤沼氏野州河合里より來りてこの村を開くといふ村中不
 隱里あり餐餐ある時ハそこより膳枕を借り來り事畢て、還
 す例あるが故ありて十具を遺一家不傳へるが今猶一二を
 存すといふ朱漆古様頗奇品あり然れども神鬼の作不似ず傳
 へ聞く佐渡國雜太郡ニ岩不彈三郎狸ありて人不金を貸しに
 りそハ借るべき金の員數と還すべき日限を記し名印を押
 て置きぬれば翌日穴の口不その金を置けりとぞ後不ハ還さ
 ざる人多あり一々バ金を貸す事を止めて膳枕等を借れる
 がこれさへ假さずあり不きといへりこの川妻のとざる類不
 や有りむ彈三郎狸の事ハ燕石襍志卷五及び諸國里人談等不
 載せて人の知る所あり



累年之患信然
永之籍城去直之象
海之藏於石少
然之各國日下
於諸之粒いり初者大

可也所
心

壬午
戊申

育
育

羽部大満多教

處ふ野田右馬助以下の人々結城を根城と^いて楯籠りけるが
落城の由を聞て寄手の未^ち近^うざる以前ふ船^ふ取^り乗^り行方不
知^お落ちふれり矢部大炊助以下残留りて野田讀岐守ふ誅^ちと
いへりその古河といふハ古利根川ふ因^よれる名あるべ^い城^{この}天^の
正^の頃^ふと有り^しと見えて今の古河城修覆の間小笠原^の
信州侯權^ふ移住せる事あり隆岩寺ハ其時の草創といふ^今の
古河城ハ康正元年六月十六日京都將軍義政公今川範忠^ふ命^め
鎌倉を破る^ふ及^て成氏ハ總州葛飾郡古河縣鴻巣といふ處
ふ權^{かり}ふ屋形を立て關宿城^ふ築田を籠め野田城^ふ野田右馬助
を籠置といふ事鎌倉大双紙下巻^ふ見ゆ^日光^驛程見聞雜記古
四五町^ふ鴻巣といふ^所あり古河公成^の御^所跡^の後^成
とぞその名のま^いひ傳^ふ細^ふてその形^と知^れず^の後^成
氏ハ武州國存^ふ落^ちそれより總州葛飾郡古河縣^ふ落^着敗軍
の士卒を集め下河邊城^ふ籠^りひ^とると同書^ふいへり是今
の古河城ありそハ下河邊^ハ古^き庄名あるが成氏朝臣のこ、

ふ座^おせ^しより縣の大名を稱する事とあり^しあるべ^し按^ふ永
成氏^ノ移^ラセ玉^フハ故^ト下河邊^在司^行平^ガ館^ト聞^エシ古河城^ナ
ナリ其^後城南^鶴巢^トイ^フ處^ニ有^御所作^トい^へるハ前後^の差
り^あり松本勘兵衛といふ^人あり古より古城迹^ふ居^て其處^の事を
掌^れり城迹草地堤堀共^ふ六万坪外^ふ田地十三町歩を有^ちこ
り^しといふ今ハ古^ふ如^くず^とあ^む

ワが^い不^ハみ^やの乾^何と^ある^し古城山^とひと^とそ^ふあり^し松本可成^古城^庵

沙山 元栗橋の新田トヨブ^ふ在^り方二町許^こ、^ふ登^りて一望
すれ^バ川流四面を圍^匝一富士日光筑波の山々雲間^ふ出^没
て風景最佳^し春夏の間雅客遊觀^の處^とす

富士見渡 江川より關宿向^む河岸^ふ渡^る處^{あり}富士の眺望此處
を最勝^とす

六國山東昌寺 山王村^東昌寺^ふてハ山王山村^{とい}ふ^在り築田
河内守滿助の菩提寺^{あり}禪宗

制札寫

條々

下総國

東昌寺

- 一 當寺同門前百姓等急度可還任事
 - 一 寺家門前不可傳立并田畑立毛不可妨任事
 - 一 對寺中門前輩狼籍非分、族控有と者可為一殘切事
- 右若於遠犯、輩志忽可法處嚴科志也

天正十八年六月 日

鐘銘

大日本下總州下河邊庄櫻井卿六國山東昌禪寺大鐘

願主 大旦那 築田河内守持助

時文明八年六月廿四日 住持毗丘即菴老衲

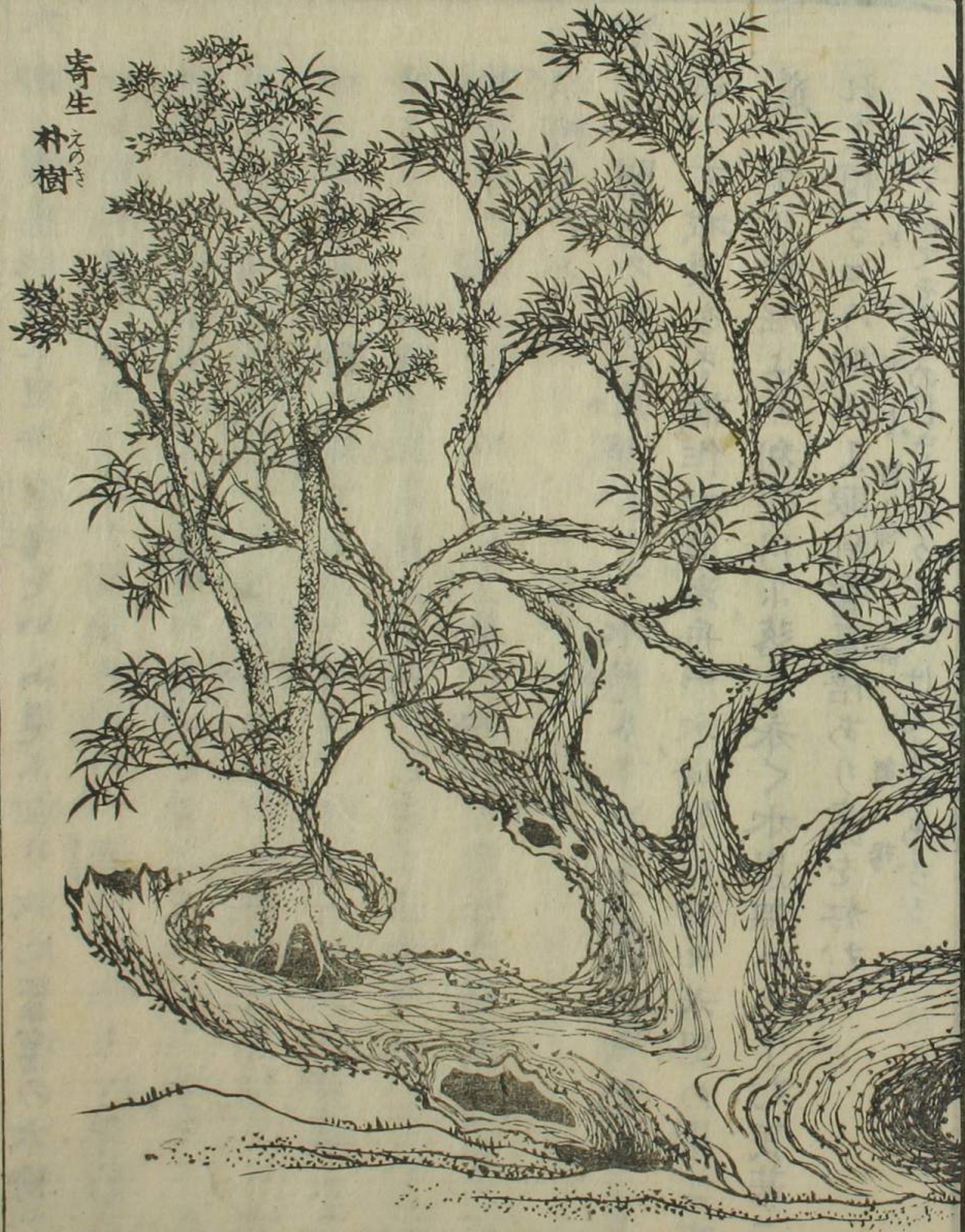
關宿城 二の城ハ古河公方の臣梁田氏の築く所あり梁田ハ從
 來下野國人今も下野に梁田村あり世々鎌倉公方に事へりか

くて永享十年十一月一日築田河内守同出羽守等持氏卿の相
 州大藏御所を留守一三浦介時高と戦ひて死すこの後嘉吉元
 年四月十六日結城落城の時持氏卿の息春王安王の爲に築田
 四郎ハ長尾因幡守討に此同出羽三郎ハ武田刑部少輔入道
 討に此りかくて寶徳元年九月九日春王の弟成氏朝臣關
 東の都督と爲るに至て結城の一黨と同く出頭の臣りこの
 後康正元年六月十六日京都將軍義政公の命に因て今川上總
 介範忠鎌倉を破るこの時成氏朝臣ハ下總國葛飾郡古河縣鴻
 巣に移りて關宿城に築田を籠めり由鎌倉大双紙下巻に見
 ゆその明年正月十九日成氏朝臣の命に因て南圖書助等と同
 く千葉介實胤の有る下總市川城を陥るこの頃築田河内守
 ハ關宿より打て出て武州足立郡を過半押領し市川城をとる
 と同書不見えりこの後築田中務大輔頻に上杉と和親の事

を勸むこの後變革千般あり弘治二年十二月十五日北條氏康より晴氏義氏兩君を關宿城に移し築田中務少輔政信をして守護せしめたる事關東古戦録卷六に見ゆこの後上杉輝虎を防ぐむとて加勢ふ來りし結城六郎晴朝と永祿三年正月四日柳橋ふ於て誤て同士軍せし事同書卷九に見ゆかくて天正元年閏十一月十七日築田中務大輔政信同出羽守綱政佐竹義重ふ降るを以て北條氏政の兵ふ敗りれ佐竹の遊客と爲り城ハ北條家ふ屬せる事卷十九に見えりさて同十八年七月十一日小田原落城の後同八月九日領地拜領中畧下總國古河小笠原信濃守秀政同關宿松平三郎太郎康元同關宿内岡部次郎右衛門長盛一万二千石任内と房總治亂記見えり因州侯の墓碑ハ臺町ある觀照山宗榮寺在り當寺開基大興院殿前因州太守傑傳宗英大居從四位少將松平氏源康元癸卯年八月十四日と鑄り背面爲當寺康元之墓草創年來而自破壊于時明和三丙戌歲八月十

四日從五位下源朝臣松平久世家の領と爲りしハ安永三年より因幡守康卿修補之とあり嗣封の君侯世徳澤を布きひて萬民鼓腹し市鄽繁榮あり東サシ臺町南シ江戸町内河岸元町あり内河岸の對岸ハ向河岸ありこの二處問屋船宿多く最繁華あり江戸シ行く旅人舟ハ向河岸より出づ江樓シ柳樽を開き江岸シ柳枝を折るその景況喻ふる小物あり寺院ハ國花萬葉記卷十シ松意寺洞家關宿在寺領廿石と見え諸國圭齊錄下總國新義真言部シ十五石葛飾郡關宿昌福寺と見ゆ古河晴氏朝臣墓 宗榮寺後の園中在 高五尺許土人字シて御所卵塔シといふ晴氏朝臣ハ永祿三年五月廿七日卒を法號ハ永仙院殿系山道統あり





寄生
朴樹

川南

三十三



蛇柳

五

大柳 關宿城東半里許葦場といふ處不在り故に葦場の大柳といふ中利根川より三四十間南方堤の内園の中あり廿年前ハ枝の下一丈許ありといふ今ハ草地と爲れり六枝三不分ウレ各太三四圍南北延長十四五間許南の枝不朴樹の寄生あり大四尺許その本幹の蟠る不因て命にて蛇柳といふ一奇事あり時としてこの柳川北不見えて夜行の舟不方向を失ハ一む此蓋層樓の類ふして川北の空氣不映ずる者あり是を以てまゝ妖柳といふ

堀割 關宿の邊ハ卑溼不して水患多し故不嘉永の初領主より命して城東ある桐作木間瀬舟形木崎等の村々六里の間不水道を作り水堀より利根川不落し永く水患無からしむ民甚これ不頼るこの桐作不眼科醫鳳梧あり畫を好む

春氣候此變者糠つけさけてそろこのむきハぬぐごづけてまひあがる

これハツケタゲといひて古き相歌の由鳳梧この邊の事とと談る因不言へり

お、腹くつてう明神 水堀村不在り傳聞往年三月初午の日利根川洪水不て大なる木の方不して中不穴あきさるが流來りしを朝艸刈る者共これを上ルむと爲しうと重さ白の如く不して揚らず乃繩不て柳不敷置村人を聚め各飽食せしめ同音不オ、ハラクチイナエンサラハウと囃しあがりこれを引揚不て産神不祭れり今もその例不因て毎年當日右の木を神輿と村中の新夫不舁かしむ利根川の畔不十間四面の池あり祭の前日その池泥をとりて周不置しむ而當日神輿を池中不舁入る、不村人池周不羣集し同音不オ、ハラクツテウエンサンバウイ、ツモカウナラヨオカンベエと囃しつ、泥を池より上りむとする人不と神輿不と擲ちてあげさてねバ困

いをてさる時昇人の妻どもわびて漸ふ池より上がりせ身を
も神輿をも利根川ふて洗ひ妻のもて来さる新衣を著るこれ
より村人神輿を受取り元の如く社ふ収むこれ例祭ありとぞ
我慢 我慢とハ努力の義ふ轉言へりこの處水堀村の下ふて
衣川落合の衝あるからふ流頗急あるを舟子共聲を掛け今少
の間ぞ我慢々々と言ひより遂ふ名と爲り一かりこの處河
水最佳といふ

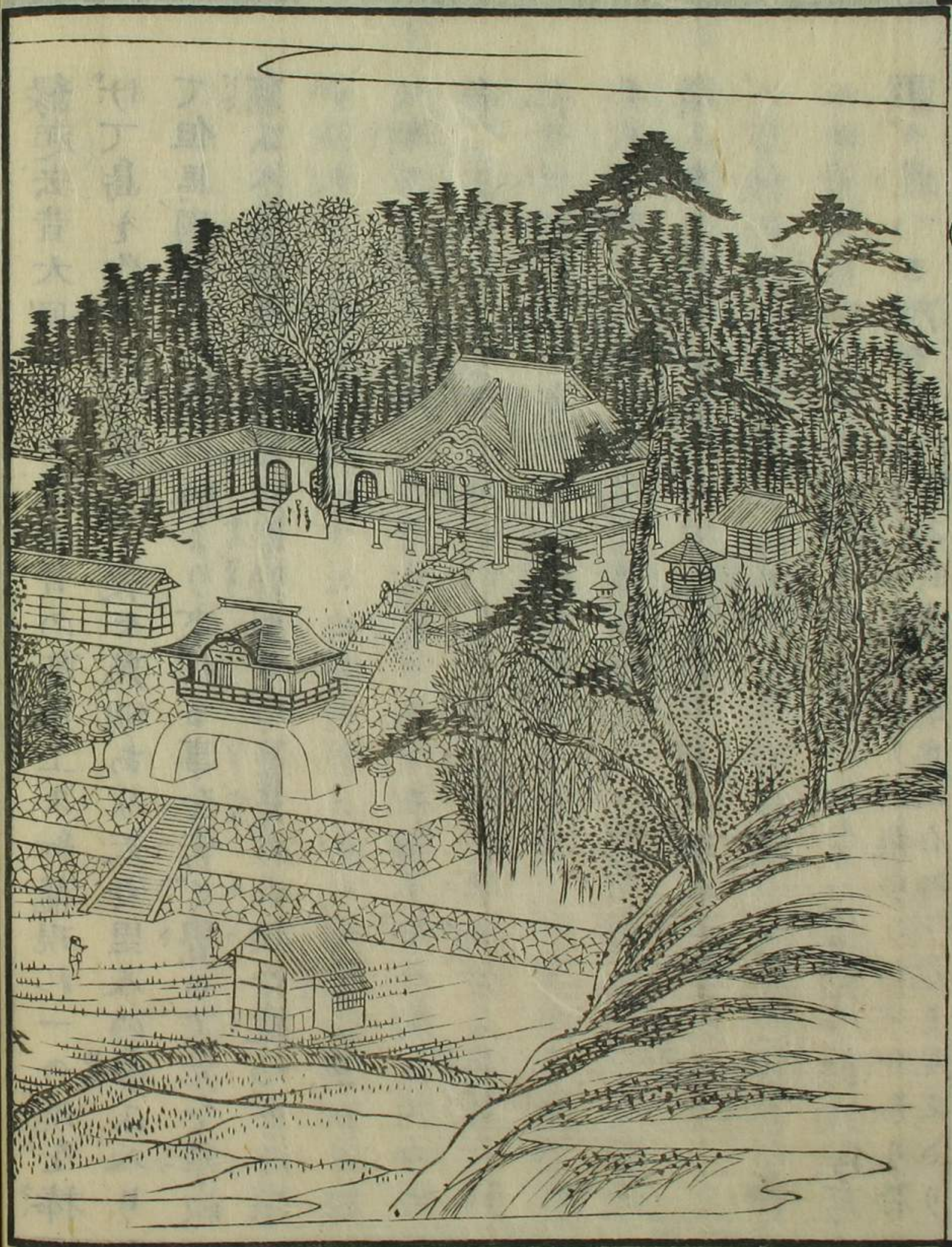
布施辨才天社 布施ハ江戸より松戸小金を経て水海道へのゆ
くてあり田中ふ孤山あり古ハ湖中の島ふりとぞ辨才天を祀
る東麓ふ窟あり別當を紅龍山松光院東海寺といふ眞言宗常
陸國大塚護持院末ふり寺寶ふ蟠龍石あり此處ハ關東三辨天
の一ふして詣人羣集一戸頭の渡舟を望み曙山の櫻楓を眺め
て頗勝景と稱するふ足れり

縁起云昔大同二年七月七日の朝湖上ふ紅龍現れ一の塊を捧
げて島を作る天地震動一夜々光明あり天女里人の夢ふ入り
て但馬國朝來郡筒江郷より來れる事を告ぐ覺めて光を尋ね
窟ふ入れハ長三寸餘の尊像あり乃葦葦の小祠を建つその頂
弘法大師の經過ふ値ひてこの事を語る即大師嚮ふ筒江ふ於
て刻する所あり乃この寺を造り山を紅龍と命け里を天女の
利益ふ資りて布施と命かくて歸洛の後嵯峨帝ふ奏聞一弘
仁十四年田園を寄附一伽藍を造立す然るふ承平年中將門の
兵火ふ遇て衰廢す經基王武藏守と爲て箕田城ふ住する時此
處ふ來り忽瓦礫場松上の光を見狩衣の袖を刷ひ祈念せし
ハ尊像即袖ふ移りふを奉持一天慶三年二月將門伏誅の後
この寺を再興一院を松光と命く今の本堂ハ享保の初法印秀
調が建つる所あり

取意○按ふ經基王武藏守非ず介あり將
門記ふ武藏守與世王介源經基と見えり

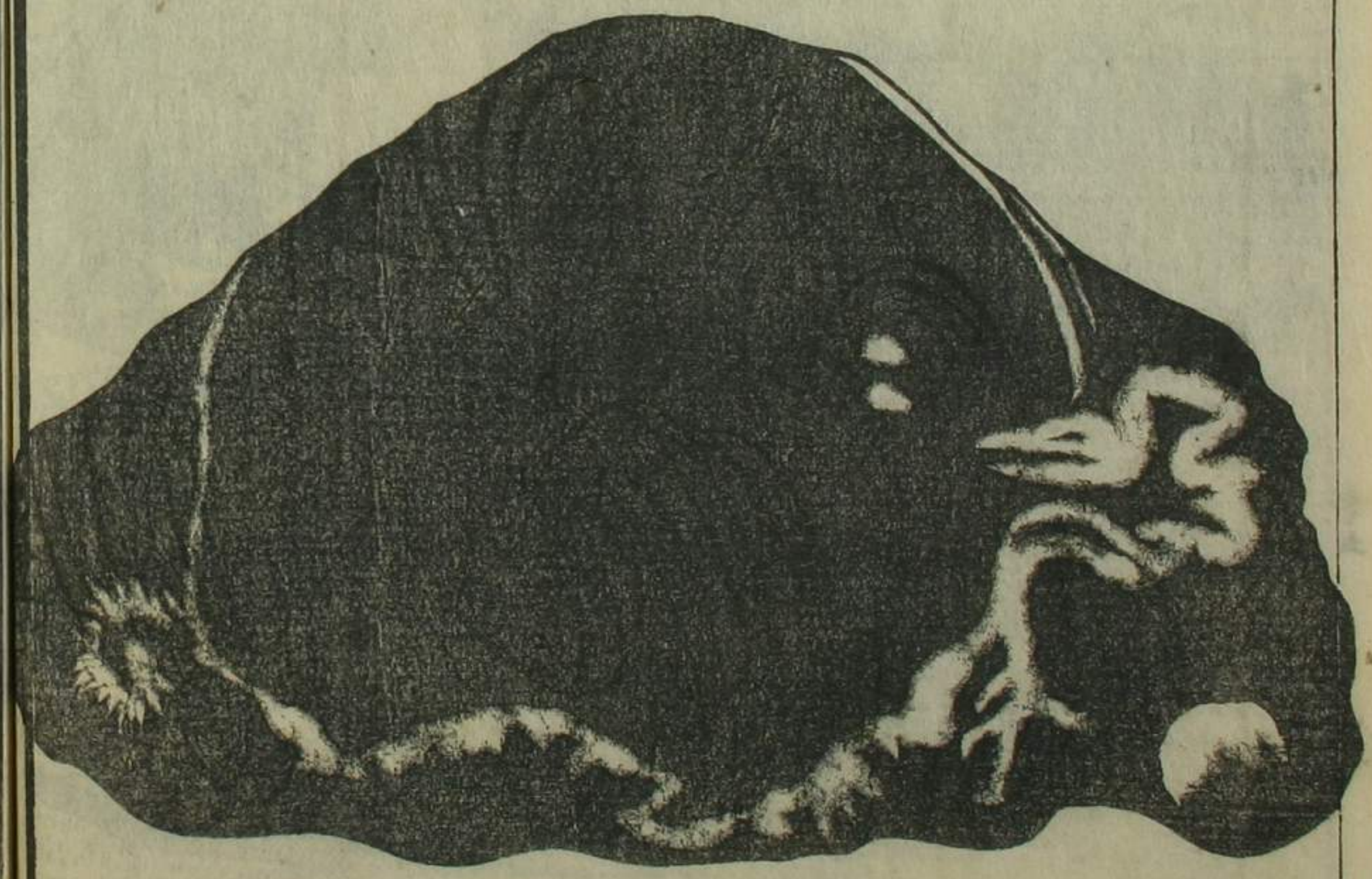


布施
辨才天社



蟠龍石
 按龍文石の事、素園
 石譜卷三、魚龍石
 潭州湘鄉縣山之巔有
 石、中畧、間有石、中兩面
 魚龍形、作蛇之勢、鱗
 鬣、爪、牙、角、甲、悉備、尤為
 奇異、といへり、されど
 り龍文、黒色、ある由り
 見え、て、この石の青質
 白章、あるふ比すれ、バ
 いさく下れり

大、如圖
 實希世之珍
 祀為宇賀神



この社地、ふ於て八月朔日、毎年風祭相撲あり、又巳年の三月ハ
 必開帳あり、岡村の延命寺、ふ埋め、る土偶、及び駒塚、ふ埋め、る
 三、ふ見えて、葬送の具、ある、べき由、いへり、
 其角

白菰と春ハねまれ布施の森

慎我

日天子社 相馬郡青山村、ふ在り、手賀沼の北、ふ在り、土人ハ御天様
 といふ一奇事あり、凶年の時、社地、ふ彫、く、芹を生、じて、近郷數
 百人の食、ふ供、す、然る、ふ、平年ハ、少、も、無、一、と、村長海老原氏、話、を、
 り、又、この、社、の、周、ふ、多、く、生、ひ、さ、る、篠、竹、を、截、れ、バ、血、流、出、て、そ、の、
 人、ふ、祟、あり、と、て、一、も、伐、る、者、か、一、海、老、原、氏、又、一、奇、話、を、い、へ、り、
 四月、十、八、日、同、村、勘、助、の、妻、機、を、織、り、居、る、に、井、四、五、歳、許、の、僧、來、り、
 て、り、水、を、乞、ひ、て、自、家、の、井、の、地、を、浚、ひ、て、吞、む、に、井、を、加、持、の、由、を、い、ひ、
 隣、水、を、乞、ひ、て、與、病、の、効、あ、る、と、傳、へ、て、去、り、を、加、持、の、由、を、い、ひ、
 一、清、水、を、乞、ひ、て、與、病、の、効、あ、る、と、傳、へ、て、去、り、を、加、持、の、由、を、い、ひ、
 一、清、水、を、乞、ひ、て、與、病、の、効、あ、る、と、傳、へ、て、去、り、を、加、持、の、由、を、い、ひ、
 高、く、清、水、を、乞、ひ、て、與、病、の、効、あ、る、と、傳、へ、て、去、り、を、加、持、の、由、を、い、ひ、
 三、川南

禁せりる猶水を盗む者断えずとあむ

御寮法性墓 青山村の東都部村大龍山正泉寺禪宗本尊の後地藏菩薩の後不

在り五輪の石塔あり法性ハ最明寺時頼の女あてこの寺を建立し命けて法性寺といふ然るあ一夜この尼住持の夢あ現れて在世の榮華の爲あ手賀沼の毒蛇あと爲り十六の角を戴あきハ万四千の鱗あを生じ三熟の苦を受くる由をいひ血盆經あ一千卷を讀誦して苦惱を救あはむ事を請あふ覺めて後地藏講會を修せしうハ夢あハ八旬餘の老僧來り明朝手賀沼あ行き見るべし龍宮あに藏する血盆經を汝あと與へむ墮獄あの苦を免れむと思あふ女人ハこの經を受持すべしとて乃夢あハ覺あふはり是地藏尊あの化身あありとぞさて明且手賀沼あ詣りし水率あに動騰あし白蓮花一莖あ涌出あし中あ血盆經一部あり乃村を一部あと命け山を大龍と命け寺號を正泉と改め題あして日本最初女人成佛血盆經出

現第一道場といふ血盆經縁起取意

下利根川 鷺養川落口以下をいふ南ハ江藏地新田ありこの邊

より安食までを鱧魚せうごの絶品せうごとす

堀町 猿島郡の地關宿の對岸結城のゆくあて繁昌あの處

あり月々六載舟を江戸あ出あし以て行旅あ不便あすこの下あカッケ

といふ處あり下小橋と浦向あ不屬あす近瘠あより薪あをこあ、不あ出あし

以て中利根川あ不あ浮あぶ

女夫松 長谷村あ鷺沼あの傍あ不あ在あり結城あのゆあ香取社あ不あ在あり圍一

丈許あその葉晝あハ常あの如あく夜あハ合あしあて離あれず故あ不あ又眠松あとと

いふこれを煎服あすれば難産あの患あありとて人々取貯あふこの香

取社あより一町許あ北あ不あ乳房あ觀音ああり

鷺戸沼 又長須沼あといふ源あハ涿谷あ一谷あの邊あより出あ屈曲あ三里

餘あ不あしあて小山あ不あ至あり中利根川あ不あ落あつこの處あハ嘉永四年あの堀

嶋郡 大光作村 十石 國玉大明神 後嶋郡 飯塚左京村 五石 八幡宮 長須坂村

治部丞あど見えり

保地沼 岡田郡 飯沼の下流あり末ハ二ふ分れ法師戸ふ至りて

中利根川ふ入るその下の方ある流平時ハ水無

衣川落口 相馬郡 大木村ふ在りて、の川中ふ我慢といふ處あり

対岸ハ水堀村あり衣川本名ハ毛野川ふて續日本紀卷廿九

天平寶字二年條常陸風土記新治郡注ふ見ゆ延喜兵部式ふ下

野國衣川驛倭名鈔ふ下野國河内郡衣川と有るも專この川ふ

因りての名あり衣川歌枕名寄卷廿四ふ懐中抄を引たりこの

國誌上卷相馬日記卷一外廻國雜記ふと歌ありお不この川の事常陸

下野國志ふと見えり

普門山禪福寺 筒戸村ふ在り諸國圭齊錄下總國禪宗ふ十三石

八斗余 相馬郡 筒戸村 禪福寺と見ゆ 相馬日記卷三云筒戸村の禪福寺

といふ語て、洪鐘の銘を讀むふ大日本下總州相馬郡筒戸

村普門山禪福禪寺万治三庚子天七月初三日住持當山中興開

山大麟玄綱比丘尼銘焉とあり本尊ハ平將門が渴仰せし等身

の十一面觀音の木像ありと上總國の花岡といふ里より遷

しゆまろりせとありといへり等身の由來ハ二中歴ふ見ゆ二

二造佛歷佛像寸法之條ふ五尺者弘法傳漢土時人長寺の傍ふ

也近代謂之等身云と此條時鄰が標注ふ見えり

最舊き石卒都婆あり鑄りたる字無ればその姓と名とを知

りず寺僧ハ相馬氏の墓標ありといふ又玉山宗雪慶長十六已

二月今日と鑄りし五輪あり連歌師あどのこ、ふて身まうれ

るふや

平將門舊址 平將門の事ハ將門記大須本 大系圖扶桑畧記卷廿

五大鏡卷一外記日記卷一二舊本今昔物語卷廿五古事談源平

盛衰記卷廿三本朝文粹卷二元亨釋書卷十皇和真俗通卷十二

大日本史卷卅二日本外史卷一ふ見えて遍く人の知る所あり

然して佐原の清宮氏多年この事迹を考へ勞くされバ今ハ彼
人ヲ譲りて此ハ相馬日記を省畧して記す并せ考ふべし
相馬日記卷三云守谷野ハ最廣き野ふて目も遙不見かすむ許
あり是相馬の偽都の構の内ふて兵士らがいむらひ跡あり
といへり矢田部海道を経て行けば守谷の里あり德怡山長龍
寺の門ハ淺野氏と木村氏とが花押せし古き制札あり又牛頭
天王の社ありてその御形ハ鏡ふ坐す裏ふ下總國守谷卿牛頭
天王守護所大同元年丙戌九月廿一日神主吉信と鑄つけり
村長の齋藤徳左衛門が家を訪ひし主人喜びて俳諧師鳥醉
がこの里ハ遊びし時記し記しとう出て見せたりさて徳右衛
門文伯醫師本村氏嚮導して相馬の偽都の舊跡尋めて分るふ先
相馬小次郎師胤が城跡ありて今ハ乾壕弁形などの形昔の儘
ハ残れり師胤ハ千葉介常胤が三郎子ふてその裔相續き徳仁

年中までこの城主ありといへり按ふ相馬氏の没落ハこれ
國眞壁郡下妻の多賀谷修理大夫高經が小田天菴滅亡の虚ハ
乗じ地を廣めむとて下總國岡田郡古間木城の渡部周防守
元綱を攻め石塚右京土岐越前荒木三河相馬求馬土岐方加勢の兵
羽生式部石塚右京土岐越前荒木三河相馬求馬土岐方加勢の兵
を以て相馬郡守谷筒戸の兩城主相馬左近大夫治胤を伐し
めたる事關東古戦録卷九ハ一時見ゆかくて明年七月十一日小
田原落城の後佐倉東金等と一時見ゆかくて明年七月十一日小
領下總國の内ハ同相馬菅沼山城守定後元和といふ年の頃土
政一石と房總治胤記ふ見えり後元和といふ年の頃土
岐氏の君ハ不生まれしが上野國沼田城へ移らしてよりこ
の城遂ハ廢れぬとぞ島の中道を東へ廿町餘行けば大塚曳橋
かどハハ處あり平臺といふハ最高き岡ふてこぞ將門が住
ミ一所ある又眩く許の深き壑を渡りてハ幡廓ハ移る將門が
齋き祭りし妙見八幡と申すがこぞ鎮座しを今ハことり山
の西林寺ハ移しまるらせりといふハ山下文小ことり山の擁護
山清淨光院といへりとぞ七見ゆ諸國圭齊録下妙見八幡と申
總國禪宗相馬郡ハ二十石西林寺と見えり

す由ハ妙見菩薩と相殿不祭れる不ヤ昔この文の上不將門記今
諸宜を偽り一事をいへりこの所よりハ千町の田面打越一奥
陳涉ガ狐鳴不近き事あり
山一臺向地赤不け岡村がううあどいふ所々目路遙不ぞ見
渡されたる齋藤氏語りはりく古ハ相馬の偽都の周ハ都て湖
湛へてまゝさき要害の地あり一を寛永といふ年の頃衣川の
流を南へ決りて數万頃の新田をバ開られといへり今と猶
田の真中不池残りて蓮ふどの生ひたる多うり熟相馬と命
一名の所由を考ふるふ所の體淡海の中の一庭かれハ狹場と
いひむを音便ふさうまとも轉一いふふるべ一按不この説
猿島ハ小島の義あるべし漸不水涸れ泥乾きて許多の村々を爲し長
洲等のミさかり一が漸不水涸れ泥乾きて許多の村々を爲し長
あるべしとさるかり古の事ハ知り後世の書ハ記し常總軍記
卷十二不多賀谷高經下總國岡田郡發向の事ハ記し常總軍記
田郡を攻むる諸士極め猿嶋郡岩井若林生む嶋中里皆掛猫内
筵打の邊の諸士極め猿嶋郡岩井若林生む嶋中里皆掛猫内
見えたるれどこの末極め猿嶋郡岩井若林生む嶋中里皆掛猫内

りるれハ猿嶋と最危一加勢せずハ有るへりずと馬洗の横
瀬主膳菅生の石塚權兵衛内守谷の橋本石見野田の野田角牛
實珠花の平岩主水大山の大山一學以下七餘騎不を以て考ふ
と一へる野田寶珠花をおきてハ相馬郡の地あるを以て考ふ
べしス長洲ハ古長須郷とよみてハ相馬郡の地あるを以て考ふ
土宗後嶋郡ハ長須郷とよみてハ相馬郡の地あるを以て考ふ
四石後嶋郡長須郷とよみてハ相馬郡の地あるを以て考ふ
原といへるハ田中の離島不て縦横不上道一里餘の廣野あり
昔淡海の廻れる時ハえといぬれ一きの島ありむとぞ思
ひやれる、今この野中を行く道をかうう海道とよべり抑
かううといふ名何とも心得がまきをよくおもへハ將門記
今昔物語おと不辛島と見え一をかううといハ訛れる不て辛
島の廣江といへるもこの周の田とあり一所を指せるあり不
この辛島廣き地不て古ハ郡の名不もよびたる常
陸介良兼が將門を襲ひて下總國豊田郡栗栖院常御殿を燒
き一餘不將門を勞身病隠妻共宿於辛嶋郡葦津江邊依有非
常之疑載妻子於船送於廣河之江といへるもこの邊あるるか
さりバ以相馬郡大井津号爲京大津とあるもこの邊あるるか

くて天慶三年二月十三日貞盛秀卿が將門の宅を燒き一條
新皇擬招弊敵等引率兵仗隱於辛嶋之廣江と有りこの時燒
れ岩井卿島廣山故跡といふ者これ一平明の十四日住
馬郡事ある時ハ守谷山棲すあるべしされバ明の十四日
居と且辛嶋郡之北山張陣相待矣といへりかくてこの日
の戦始ハ將門上風ハ居勝ちて敵を逐ひ却て風下と爲り再
ひて敗死せるも直ハ北を逐へるを待つ又將門記古事談不
の事知るべしハ改めて引きつその意を待つ又將門記古事談不
ハ島廣山と見ゆこれハ廣き島山然ふべき事あり佛
島といふハ堀を廻りて搆へ一所草木茂り暗がりておぞ
ま一き古墳あり中少許艸おひぬ所あるを強く踏めバ地不
響ありて聞こゆこれヤこの兵器おとあま埋ミ一が故不そ
の鍊氣不因りて草と木とおひいてぬあるべし里人これを將
門が墳ありといへり佛島と名づけ一ハ傍不地藏の石像又ハ
何くれの佛の石像立てればあり坂を登りて高き岡不大日堂
あり古き松おと有りて眺望好しき所あり將門がうまれ一跡

ありといふ熟この堂の貌を見る不古墳の上不建てさるあり
これ將門が骸を埋めむむ所不てかの佛嶋ハ伴類の屍不ヤ兵
具おと埋めたるべし米野井の桔梗が原といふハ將門が妾
桔梗の御前といふが殺されたる所不てその墳あり今も桔梗
ハ有りおぐら花開く事おきハこの御前が怨不因れるありと
いへり海禪院といふも間近一そこハ將門が高野山の貌を摹
して先祖の墓を造り一所ありこの寺の新皇堂といふハ將門
が靈を祭りて國王明神と稱へり按不諸國圭齊録下總國禪
高野村海禪寺今日廻り見一相馬の偽都の體を思ふ不上道四
と見えたり
里許が間不て湖の中島おれば上とおき要害の地おれば朝廷
不叛き奉り一うハ僅九年をうり不一門悉亡びふき
う波の風おれぬむ幸島の廣江をあせておとときをた 高田與清

按不相馬日記不相馬小次郎師胤ハ千葉介常胤が三郎子あり

和田村の由右衛門あるがこの二人の事ハ勸善録不載せり
そと勸善録ハさよてありぬ人をも載せざる謂あれどこの二
人ハげ不載すべき績あれ
バ引きて因ふ下不記す

勸善録中巻云下總國相馬郡岡村の林兵衛和田村の由右衛門
藤兵衛三左衛門おと多く孝貞の友聚まりて廢田一町九段許
を開きりりその廢田不澁田鹿田おといふ名あり澁田とハ窪
き田不て水常不溢れ稻苗水の爲不腐れ廢るをいふ鹿田とハ
土質よろしうろす水も足りぬをいふとあむその里の佐兵衛
七郎兵衛人名おとさる廢田とさりれるを林兵衛由右衛門藤
兵衛三左衛門と輩田主不力を合はせて墾開き今ハ良田とさ
りて年ごとの貢米滞ふく奉れりといへり

大鹿城址 天正年間小田天庵の麾下あり一六鹿左衛門の居處
あり常總軍記卷十一云爰不下總國相馬郡小文間一色宮内ハ
小田の味方不て有り一がこの頃佐竹不降りて近郷を脅し手

を廣くせむと思ひ一がかねて中惡うりれば先大鹿不攻懸
て大鹿左衛門を亡不一かの世帯を押領せむとて二百餘騎に
て不意不大鹿へ押寄せり時一も大鹿左衛門ハ所勞不て居
さりれる所不関をあけ一うハ家子須川平治を呼び何者うよ
せつらむ思ふ不小文間の一色めあらめ憎き奴らささりあら
り我此體不てハ中々矢の一筋も射出難一足弱を片付にて
我ハ腹切るべ一汝宜く片付くべ一と江ヤ一うハ須川表不走
出て家人を聚むる不漸雜人共ふ五十人許あり一うハ先奥方
を始女童を皆呼集め後の山傳一てかりき命を道れ同所の弘
經寺へ隠一たり是大鹿が菩提寺ありかくて足弱を片付れ一
うハ今ハ心安一と須川を始切て出て散々不戦ふその隙ふ大
鹿左衛門心静不切腹すこの文の續ハ下の
接に大鹿の城址ハ弘經寺の三町むかり南ある山上不在り山

南の田園を城下といふ其處の田中不鹿塚とて有るハ由有り
げふり

大鹿山弘經寺

諸國圭齊錄下總國浄土宗部云五石

相馬郡相馬町 弘經寺

常總軍記卷十一云大鹿弘經寺ハ浄土宗あり下總國岡田郡飯沼弘經寺の隱居所ありといふ又結城不弘經寺といふ有り同宗あり中畧大鹿ハ十八檀林の外不百石御朱印あり權現様眞那板不御書下とあり因て今不眞那板御朱印といふありすべて浄土宗常總不弘經寺といふ寺三寺あり

大鹿山長禪寺

鹿島日記云近嶺德基と共不最高き石坂を登りて大鹿山長禪寺不詣つこ、の樺利根川不臨きて西南の空遙

不富士峯のみさけのれとるえも言ひ難一寺ハ妙心寺派の禪宗不て文曆といふ年の頃織部時平てふ人金を施して建つとあむ時平が法名を記してる位牌不大悲院殿花輪平公大禪定門と見ゆこの里ハ昔大鹿左衛門某が住ミ一岩の跡ありとぞ按不大鹿の城址ハ既不上言へるが如く此處不ハ岩の有り一あるべし城址ハ此處の西稍北不在りて十二三町を隔つ

さてハ麓ある取手宿ハそれ不因れる名あるべし中畧近隣不臺宿村あり取手宿より東不續きとり古き名ハ何といひむ今臺宿といふハ取手よりも高き所不在る宿おれハあるべし臺ハ夕平ヒラの省謬ある由下ふいへり

按不諸國圭齊錄下總國禪宗部不五石三斗 大鹿村 長禪寺と見ゆ境内不光音骨堂あり 寺寶不光音の光音ハ此邊不四國八十ハ所の鹽場を模し設けとる人ありそハ 臺宿村

- | | | | | |
|--------|----|-----|-----|-----|
| 大鹿山長禪寺 | 同村 | 地藏堂 | 同村 | 不動院 |
| 臺宿村 | 同村 | 觀音堂 | 同村 | 樂師堂 |
| 取手 | 同村 | 念佛堂 | 小堀村 | 常圓寺 |
| 吉田村 | 同村 | 本泉寺 | 吉田村 | 地藏堂 |
| 同村 | 同村 | 安養寺 | 同村 | 大照寺 |
| 同村 | 同村 | 成就院 | 同村 | 福永寺 |
| 同村 | 同村 | 地藏堂 | 同村 | |

取手宿 江なり水戸へ行くの官道ふして地名ハ上の山ふ六鹿

氏の岩有りし因れるるべし此處の聞人澤近嶺の家ハ新

町不在り油屋與兵衛といふその詠歌を伊能願則が撰ひ載せ

る香取四家集の末に清官秀堅がその小傳を擧げりその

文に澤近嶺原姓谷澤小字吉次郎又定次郎稱與兵衛號月舎晚

號梧桐庵相馬郡取手驛人年甫二十八村田春海之門與清清水

濱臣等切磋磨礪其作歌雖好新古今集樣能占地歩不流纖巧中

畧天保九年戊戌八月二十二日歿年五十所存有雜記二卷梧桐

菴歌集一卷といへり詠歌多うれハ因ふ一首を擧ぐ

護山禪師甲斐國不歸りける馬の餓ふ法華經を贈りてよめる

かひの雲のあはれみ君すまはとに影さすものを 澤近嶺

因ふいふこの護山禪師ハ甲州惠林寺の隱居不て長禪寺小住

道徳高き禪師ありたり一時近嶺が世に冤鬼ハ無しと言争

を誇ひ連れて行きて物語りひつゝ禪師の教のまふ本堂ふ

母の爲己廿八日おあれるありとぞ當時ハ聞く人多くて誰と
物をも言ハて臥し死るるを百日誦經して成佛さしめむと
の居たり見る魂消えて禪師ハ誦經して成佛さしめむと
窺ひたる黒子の中色絹裁ハれ島田といふ結ひ柳絞
不著手小線香をもちて衆人の中不近嶺を後不從ハしめ墓所
を著手小線香をもちて衆人の中不近嶺を後不從ハしめ墓所
を著手小線香をもちて衆人の中不近嶺を後不從ハしめ墓所

この宿の本陣ハ赤野民部の後不て舊家あり庭ふ水戸景山老

公の歌碑ありげ不御歌の如く利根川の渡船取手度眼下ふ見

え富士を雲端ふ望として景色ハハむ方あり

きてゆくさきのとりてのやうに思ふ方へとくつきふたり 景山老公

床紙貼りて下方ふ纒ふ瀑布の圖かきさる上ふ御筆を添め

るふこの御筆迹ハ裸装
山あめの衣やさき春すきて夏きてこころ白く

この家の後一の古道あり佐倉街道といふそハ常陸國筑波郡山王新田ふて蠶養川を渡り山王渡下總國相馬郡山王村ふ入り毛有を經山王道大鹿ふ至て守谷道と合し取手ふ入り此處を過ぎ牛頭天王社側よりオホリふ出で利根川を渡り中峠村の内なる中峠といふ地ふ到り終ふ佐倉ふ赴くをいふ按中峠の峠を寺田德基が問ひたる高田與清が答へて相模國大住郡の轉圻村といふ有りそハ嶺ある所あり云といひて批圻の轉圻なる由を説ひされど誤り上總國市原郡引田村の中立野良道ハ國史を善く讀みたる人ありそを曰く鹿島日記の峠の説ハ誤り中尾落冊子ふ選ふ四方を見渡せばよたを呼ひて吾が村ふ荷峯養若峯有りまゝ下總ふて山の崖をこの隣なる立野村ふ荷峯養若峯有りまゝ下總ふて山の崖をこのヒヨといふ理あり

本多氏城址

井野村ふ在り本多作左衛門重次の城址あり治亂記天正十八年八月九日領地拜領上總部小井戸本多今も其作左衛門重次三千石と見え云井野村ハ臺宿の東北の方坪の處を城内といふ鹿島日記云井野村ハ臺宿の内屋敷ふどの坪

字あれば舊き城の跡あるべし又花輪臺といふ所あり織部時平が法名を花輪禪定門といひしを思合ハするふ時平が棲所ありにむと計り難し云云下ふ壇輪作りルむ處又ハ武隈の北といへど誤臺宿より西北ふ向て行けば左ふ井野天神社有ふて西北あり御林の中ふ御墓山ありその西北ふ屋敷といり猶行けば右の御林の中ふ御墓山ありその西北ふ屋敷といふ地有り昌松寺のさて本の路ふ歸りて左ふ普門院の故墟あり城内の東あり後今之處ふ移るといふされども自燒して去り以て今も年ごとふ米一俵を賜はるといふ今普門院ハ此處上り北ふ在りて左方同村昌松寺ふ隣り桑原村光明寺と三處對立す又本多家の香火院ハその上ハ城内あり南ふ堀内との隣村ある青柳の本願寺ありその上ハ城内あり西ふ桑原地あり路を隔て、右ハ花輪臺あり猶西北ふ行けば山王渡ふ出づ

小堀河岸

井野新田の地ふして岡堰より蠶養川を堰き入れ、る流を利根川ふ落す處ふ然いへり鹿島日記ふ出づこ、ハ井野新田ありといへるハ利根川ふ臨こる地ふして船宿稱時ふつきて誤りたるあり

三川北

五家皆寺田氏あり德基が家あり今水神を産神とす例祭六月
廿日夜ふ入りて神輿を船ふて利根川ふ浮べ流ふ隨て靜おひ下
るこれを御濱船ふハ幕を張り鋒を立て夥く挑燈を掛け笛大
鼓おひ物の聲高欄の内ふ起るこの時後舟より烟火を擧ぐその
數甚多しこれを看る人兩岸ふ雲集し持連ぬる燈ハ月の如
く水中ふ倒映して金波を生じ傍涼風ふ暑を消し酒食の興を
添へて實ふこの地の壯觀あり

第六天山

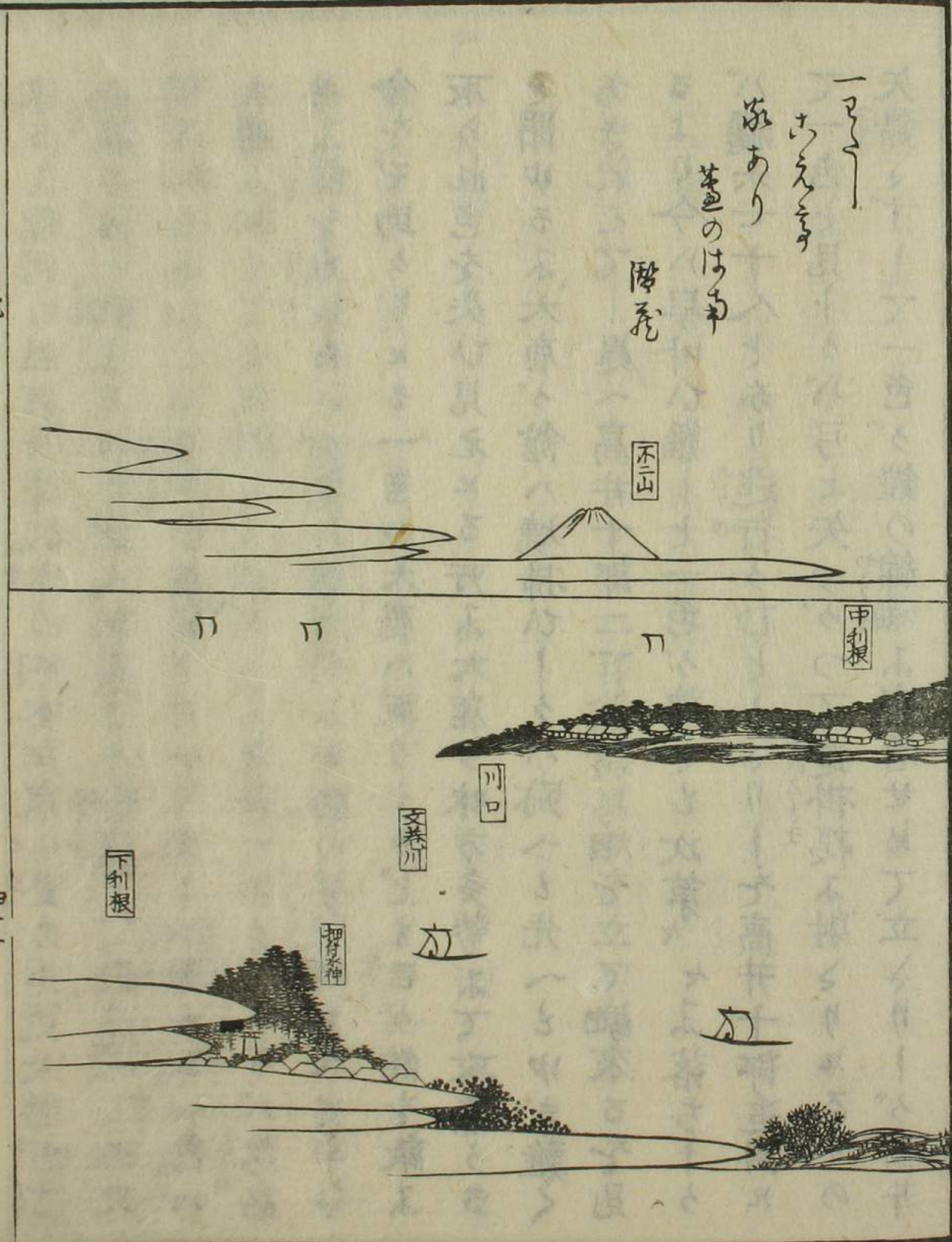
小文間村ふ在りて松樹茂りたる山あり天明年間神
道徳次郎紫紬泰助おど言へる賊首黨を結びて此處ふ住めり
今も第六天社の西一段低き處ふ竈の迹ありといふ相馬口記
卷三云酒
詰村ふて水戸路を横さまふ經て用水ふ沾ひて下る馬手の方
の見やりある山ハ相馬郡小文間の第六天山といふこふ昔
ハ盗人のあまふ籠り居て往來の人を引剥おどせし
ふ今ハ遍き大御惠ふ因りて然る煩も無しといへり
あるやいろふ小文間山の末の松をえぐるむかしくを

御墓松

小文間第六天山の東ふ在りて利根川ふ近しこの邊す
べて西方
といひひその山下を南子ガラ小文間の城主一色氏の墓標あり
といふ川の向ハ芝原あり古ハその下ふ五輪塔ありといふ頗大樹あり景色最佳し

一色氏城址

小文間の戸臺ふ近き處ふ在り詰丸と覽しき處ふ
天神社あり下の谷を城内といふ
常總軍記卷十一云一色爲濟ましりとい悦びて大鹿が館ふ火
をかけ勝關あげて酒宴して居りたるふ大鹿が家人か奴て
左衛門が遺言しして聳の高井十郎ふこの由を告げしハ高
井大ふ驚き又ハ怒て急ふ勢を集めたるふ常々一色ハ我慢押
柄ふして動れば鬪諍を好し者ふれば隣城と睦ららず又大
鹿ハ常ふ柔和ふして志平ありし者ふて人これを貴びれば
憎き一色が仕業うふ今少早うむふハ討せせましき物ある
を殘念至極ある次第とて大ふ怒り其よりして我れと集り



一
 魚あり
 遊あり
 遊のほり

階尾



江頭宿野櫻訪漁
 正消愁赤鯉千條
 網解疆一丁鈎月
 五烟柳浦舟整碧
 蘆洲好景何當比
 菟公赤墜遊

昇吟孝

引控

魚の若や

夏九月

柳屋

來るふ藤代の並河兵庫柵木の柵木左京小更こぶの小更大膳酒詰
小泉の面々馳ま來り五百餘人相集まり評議ひやうぎして引違へて小文
間を攻むる事こそ良計りやうけいかめとて小文間こぶんま不攻懸せめりくる一色ハ
大鹿おしか不在りて小文間こぶんまハはぐくき勢も無なりしうバ忽高
井たけ不館たけを乗取のりられ女童にようどハ泪なみだと共とも不井野ふいのの普門院ふもんいん不入いて辛くるき
命いのちをぞ助たすけりたる一色ハ大鹿おしかハ取とりしうども己おのが館たけを敵た不
取とりれ色いろを失うひ見えたる所ところ不大鹿おしかが味方あじ多勢たせいふて攻懸せめくる
と聞きゆる不大鹿おしかが館たけハ焼拂やきひしうバ跡あとへと先まへとゆき難がたく
あきれたてし處ところへ高井たけ十郎じちやう二百餘騎にひやくじゆ馬烟ばえんを立て馳ま來るを見
るより今いまハ早叶はやひ難がたし一色いしきが勢せいども次第しだい々々々々不落おちしう
バ纒ま六七十人むそちじゆとかり逃のが行ゆくむとしりし高井たけ十郎じちやう追掛おひれ
て一色いしきと見みしうバ弓ゆみと矢やつがつて追掛おひれ射やりたるその
矢錯やまさずして一色いしきが鎧よろいの綿わた噛かみ噛不沓くわ卷ませめて立たりしう高井たけ

固もとより精兵せいへいあれば一色いしき二言にごんとも言いはず馬うまより落ちし處ところを高
井たけ郎らう等らう久野くの虎次郎こじちやう起おこし立てす首くびをとる高井たけハ大鹿おしかをバ討
させしうと當あたの敵たを打取うちて勝鬨しきあげ味方あじの面々おもむへ一礼いちれいして
高井たけ館たけ不ぞ歸かへりたる由よしあき企こころして一色いしきハ滅亡めつたうしたるこそ不
覺おぼされ高井たけハ其そのより小文間こぶんまを普請ふしやうして究竟くわうけいの要害やうがいありしう
ハ小文間こぶんま不移うつりて威いを逞たくまくぞしりたる

戸田井渡 小文間の内うちある戸田井と不て蠶こ養う川がを渡わたる處ところあり筑
波つば山やま東北とくほくふ見みえて景色けいしき最もよし相馬さうま日記に記き卷ま三さんふ戸田井とハ小文
間まの内うちあれば堤つを隔へて、子飼こが川がの川邊が住すむ田居た居いあれば外
田居た居いといへるふやといへるハさる事ことあるべし

書ふ卷ま川が 常陸とく國くにより落おつる蠶こ養う川がの落口おちりあり 蠶こ養う川が將門しやうもん記きふ
堀ほり子飼こが之の渡わたと見みえ東國とうこく土人との説せふ文間ぶんま庄しやう 立木た村むらふ文間ぶんま明神めいじん
戰いくさ記きふハ古貝こが川がと右みぎり土人との説せふ文間ぶんま庄しやう ありより左ひだりの名なと
爲なりすべしこの邊への地ちをと小文間こぶんまの間ま不て文間ぶんま川がといへる
并ならせて文間ぶんま八十石はちじゆといふ

が誤れるありといふ古歌

水草のかきまかせともなれぬはよこまき川といはふるべし

國花萬葉集卷十下總國部云書卷川 名所不出按に名所景

物不見古河渡と同一流なり水上あり云これハ何處ある云

知り難し猶考ふべし

水神社 戸田井渡の東押付村に在りこの村桃園多し土人曰く

この村の一里許東に大平村ありそこは住まゆる人を尊びて

御大平様といふ一日此處に來りて魚を釣れるを水神甚怒

りつうまを潜牛うしに乗り來りて釣竿を奪うばひむとせしうハ甚驚おどろきて側か

る藤蔓ふぢづるを投なげ、るふ牛の右角うしに係りたるを互に牽合ひひたる

ふ終ふ角折れて別れわかれりしとぞさればこの神體ハ右角うしをかき

潜牛うしに乗りたる木像あり別當徳満寺より出づる御影も同一

今も村人水神の嫌ひ多ふとして藤を用ゐず又大平村の人を嫌

ふといふその御大平様ハ今もその村にて祭りて大平おんひら権現といふ

